

---

# 幸多かりし賛美の世界で

謳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幸多かりし賛美の世界で

### 【Nコード】

N0492T

### 【作者名】

謳

### 【あらすじ】

幸多かりし賛美の世界、ヴェル・ヴィーラ。ヒトとケモノの住むこの世界に突如現れた、『顔のない者』たち。それはヒトとケモノの血肉を齧り、齧られた者は『顔のない者』となり…。抗う事が出来るのは”傭兵”のみと、傭兵たちは長きに渡り『顔のない者』を狩り続ける。訳あり過去を持つ”ウォルフの傭兵”一行は、徐々に世界を覆う戦争の気配と世界の真実に飲み込まれて行く。

ちよつとずーつ更新。

## 序章

むかしむかし、ずっとむかし…。

世界は穢れを知らず、光輝く意思で溢れていました。

その意思は時折風に流され水に流されてぶつかっては合わさり、ついに神になりました。

しかし、神は自分で立ち上がる事が出来ず、倒れて壊れてしまったのです。

散らばった六つの破片から、純白の羽を持った六人の天使が生まれました。

一人目の天使が言いました。 ” 純白の羽で命キトを作ろう ” と。

天使は世界のあちこちへと飛んで行き、 ” 命 ” を作り始めました。

でも、六人目の天使は ” 命 ” を作りませんでした。

ある日、三人目の天使がどうしてと問いました。

すると六人目の天使は言いました。

ボクの羽が汚れているからだよ。

六人目の天使の羽は汚れていました。

神が倒れて破片になった時、一つだけ泥に浸かってしまったからでした。

汚れは消えませんでした。

だから”命”を作りませんでした。

”汚れた命”は作ってはいけない。そう思ったからです。

そこへ四人目の天使が来て言いました。

”・・・?”

その言葉に、六人目の天使は泣きました。

## 戦火の火種 1

クルーン・ゾの湿地帯を抜けると、カストダル大陸の南端、真南へ向けて突起のようにはみ出る地域へ出る。

そこには、カストダル大陸の七割もの面積を所有するグランド・カスタ王国の首都である、シャートル・カスタがある。

カストダル大陸最大を誇る港があり、多くの傭兵や商人で賑わう街だ。

「いきたくねえ。」

道中ずつと繰り返していた一言を念押しすようにもう一度言い、ミーヤ・ミンミが立ち止まった。

ミンミはミーヤ種と呼ばれる種族で、猫のような耳が生えている。尻尾は進化の過程で取れてしまった、らしい。

ミーヤ種は名のはじめに必ず種名を付ける慣わしがある。ミンミという個体名ならば、『ミーヤ・ミンミ』だ。

そのミンミは、仏頂面をして手に持っている大槌の柄で、自分の肩を叩いている。槌系の武器を手にはしているのは、モンク系戦士である証である。

「ミンミい…。駄々捏ねんでねえぞ。」

少々田舎訛りのキツイアルバイン・クオートが、ミンミを穏やかに嗜めた。

アルバインは一般的に”人間”と呼ばれるヒュント種だ。痩せ細って背が高いが、その背と同じくらいの長さの杖を背負っている。杖は、魔道士である証だ。ちなみにミーヤ種は蔑まされる時、”猫”と呼ばれる。

「嫌なもんは嫌だ。あそこの傭兵の扱いは酷すぎて嫌いだ！」

ミンミが尖らせていた唇をさらに鋭くさせて、じろりとアルバインを見た。

ミンミの態度に、合計四名の一行の残りは、小さく溜め息を吐い

た。

気持ちは解らないではない。

ミンミの言うとおり、程なくして到着する予定のシャトル・カ  
スタの民の多くは、傭兵を蔑む。

幸多かりし贅美の世界

ヴェル・ウィーラと言う名のこの世界には、ミンミの種族である  
ミーヤ種、アルバインの種族であるヒュント種の他、尖がり耳の工  
ルファイ種の三種族があり、この三種族は何れも知性を持ち、文化を  
築き、集団で生活を営む”ヒト”である。しかし、これ以外にも”  
ケモノ”と呼ばれる無数の生物が存在し、中にはヒトを襲う種もい  
る。

大抵のケモノはヒトより体も大きく強力であり、襲われれば勝ち  
目はない。それ故、戦う手段を持たぬヒトが遠方へと旅をする時、  
或いは何かを所望する時、その能力を持つ傭兵が雇われる。

太古から自然のバランスを崩さぬ程度に傭兵はケモノを狩り、ヒ  
トは自然へ踏み込み過ぎず、暮らして来た。

だが、いつ頃からか、得体の知れぬ”モノ”が、この世界に現れ  
た。

それはヒトのみならず、ケモノまでを襲い、血肉を齧った。そし  
て、齧られた者は死ぬのではなく、同じ”モノ”になった。

それには、『顔』がなかった。頭部前方はただ深く深く窪み、深  
い深い闇の中に、おぞましく冷たい光が五つ、輝いている。

ヒトビトはそれを『顔のない者』と呼んだ。

ケモノを超える体を持ち、ヒトの傭兵を超える力を持つそれに抗  
う手段も見当たらず、しかし明らかに、それは自然のものではなか  
ったため、ヒトビトは恐れ、益々傭兵の需要が増えた。

だが同時に、『顔のない者』を恐れる余り、それに触れた傭兵ま  
でをも遠ざけるようになった。

傭兵なしでは生きられない世の中にあって、傭兵を忌み嫌う。

傭兵の立場は徐々に低下し、今では街で蔑まれる事が多い。

シャトル・カスタは、特にその色が強い。

ミンミはそれが嫌だった。

「しょうがねえべ。」

アルバインが眉を八の字にして言うと、アルバインの足元で「行こうよ。」とリチュリー・リチュが言った。

リチュはエルファイ種だが、エルファイ種には亜種があり、古来よりいる原種エルファイと、形が違う。背が高く、スラリとした体型の原種と比べ、亜種は背が低いので、”リトル・エル”と呼ばれている。背が低いと言っても度合いは半端なく、ヒュントの膝丈ほどしかない。

リチュはリトル・エルの騎士で、ヒュントの平均身長ほどもある大きさの大剣を扱うが、普段は背負って行動出来ないため、傍らにいるエルファイ種の戦士であるウォルフガングが代わりに背負っている。故に、普段からリチュとウォルフは行動を共にする。

「行こう、ミンミ。ここで止まっても仕方がない。金もないから他の街へもいけないしな。」

次の依頼主はシャートル・カスタの大地主だし、仕事が終わるまでは屋敷に寝泊りさせてくれると言っただから、殆ど心配ないだろう？」

ウォルフが言うと、ミンミは尖らせた唇を一文字に横に伸ばして、上目遣いにウォルフを見た。

一行のリーダー役であるウォルフには、駄々姫のミンミも齒向かえなかった。ミーヤ種の村を傭兵になるべく旅立ってから、ウォルフのおかげでここまで生きて来られたようなものだったからだ。

「…わかった…。」

ミンミが言うと、ウォルフが苦笑した。

「すぐ終わらせて、南に行こう。」

ミーヤの村にも行きたいだろ？　そこで暫く休める。

もう少しの辛坊だよ。」

そう言うと、ウォルフはシャートル・カスタへ向けて歩き出した。じき、日が暮れる。

振り返った街には、灯りが灯り始めていた。

シャトール・カスタは巨大な貿易港を持つ大都市だ。

湿地帯を下り抜け、街を左右に分断するように流れる大きな川には、ガレオン船を通すための跳ね橋がかけられ、ちよつとした観光名所にもなっている。

街の北側周辺には巨大な岩山が、南側には看守塔を何本も備え付けた防壁が聳え、街の中心にはグラント・カスタ王国が国教とするアムル教の大聖堂が聳え立つ。

アムル教は、天使として生まれ、今では”始まりの女神”とか”誕生の女神”などと呼ばれるエル・アムルを崇める宗教で、種族に拘らず信者を獲得し、信仰する国は大小合わせ三〇を超える国際的宗教である。勿論、エルフィの国マルレイン王国やミーヤの国ミルグ王国の民にも信者は多くおり、中でもマルレイン領メルガニスタ独立行政地区には、シャトール・カスタに引けを取らぬ程の大聖堂がある。

発祥はカストダル大陸の北西にあるグラント・カスタ王国の隣国パルバ・ア・ダル共和国の辺境地域と言われている。グラント・カスタもパルバ・ア・ダルもヒュントが築いた国家であるため、アムル教信者はヒュントが中心となっている。白を好み、緑を色鮮やかなエル・アムルのシンボルを刺繍した白い大きな布を被って生活者としている他、武装すら白いため、アムル信者は異教徒から『白い民』と呼ばれていた。

そんな白い民の住むシャトール・カスタの、建国当時から面影の変わらぬ灰色の石造りの街並みを横目に、一行は依頼主の屋敷へ向かって進んだ。

身なりからすぐに傭兵と解るため、すれ違う白い民の視線は鋭く冷たい。中には、あからさまに距離を置いてすれ違う者までいる。

「ケツ……」

ミンミが悪態を吐いた。態度に出すのはミンミだけだが、気分が悪いのはミンミだけではない。



「しょうがねえべ…。」

気分は悪いが仕方がないと、アルバインが呟いた。

王国大正門からアムルの大聖堂まで真っ直ぐに伸びる大通りを行くと、大聖堂を中心とした大広場から、合計八本の大通りが放射状に伸びている。その大通りの中で、真北へ伸びる道の先が、依頼主の屋敷へ通じている。

「あっちだな。」

依頼状を見ながら、ウォルフが言った。

依頼主の屋敷は、街の北側の岩山のすぐ目の前に建っていた。既に陽も落ち、暗がりの中、樹木の生えない岩山を背に、黒く光る鉄柵と門で囲まれた大きな屋敷は、さながら岩山を護る神殿のようだった。

ウォルフは門の脇に立つ白い鎧の守衛に歩み寄り、依頼状を手渡した。守衛は依頼状を手に取り、中身を確認すると、門を開いて屋敷まで一行を先導した。一行が門を潜ると、すぐさま門は大きな音を立てて閉まった。

門から屋敷までは美しい石畳に舗装された道が伸び、両脇の庭には背後の岩山と不釣り合いな程に花が咲き乱れている。

屋敷のエントランスの前にも白い鎧の守衛が二人おり、門から一行を先導した守衛は、その守衛に耳打ちをすると、預かっていた依頼状を手渡した。屋敷前の守衛は依頼状を見、門の守衛に一つ頷くと、一行を見て「ここで待たれよ。」と言うと、返事も聞かず、屋敷へ入って行った。門の守衛も一行を置き、門へと引き返した。

三分ほどするとエントランスが開き、先程の守衛が執事を連れて出て来た。

「お待ちせいたしました。どうぞ中へ。」

執事が言くと、守衛二人が扉を大きく開け、一行を中へ促した。

一行はウォルフを先頭に屋敷へ入った。執事に続いて大きな細く長い廊下を行くと、大袈裟なほどの装飾が施された豪華な扉が目の前に現れた。

「お連れいたしました。」

執事が声をかけると、扉が内側から開いた。扉脇に移動した執事に促され、一行は部屋へおそおすと踏み込んだ。

部屋には床から天井まで届く大きな窓と棚が並び、革張りの書物や銀食器が所狭しと並んでいた。それらは、隙間を埋めるように無数の黄金の蜀台に立てられた蝋燭と壁に添え付けられた多数のオイルランタンの光に照らされ、眩しいくらいに輝いている。

依頼主を探して見回すが、中には扉を開けた従者しかおらず、一行はどうしたものかと顔を見合わせた。すると背後からふてぶてしい声が聞こえた。

「キミらかね、”ウォルフの傭兵”は？」

振り返ると、嫌味たらしく片眉を上げた、脂ぎった顔の小太りな男が立っていた。依頼主のようだ。

ウォルフが立ち位置を変え、一礼をする。

「依頼状を頂きました、リーダーのウォルフ GANG です。」

「エルフィか。まあいい。キミらの一行が一番腕が立つと言っが、間違いないだろうな？」

依頼主はさらに眉を上げ、ウォルフを見た。ミンミが腕組をして、踵をトントンと鳴らして苛立ち始める。

「過去の依頼主の評価ですから、私たちには解りませんが。仕事を失敗した事はありません。」

ウォルフが穏やかに言うと、依頼主は「ふん」と鼻を鳴らして、部屋の奥の大きなデスクに腰を下ろすと、ウォルフに向かって顎でデスク前のソファに座るよう促した。

ミンミの頬がぴくりとしたのを見て、アルバインとリチュが冷や汗を掻いた。

柔らかなソファに一行が腰を下ろすと、依頼主はデスクの上で手

を組み、前屈みになって一行を睨み付けた。

「自己紹介が未だだったな。私はドルトムント。伯爵の称を授かり、シャートル・カスタの大地主を首都開拓以来任されているドルトムント家の当主だ。」

早速仕事の話にするが、キミらには、裏山の遺跡の調査を依頼したいのだ。」

裏山とは、屋敷裏の岩山の事だろう。

「遺跡？」

「ああ。」

裏山は、今はもう掘れないが、昔は黒鉱石が採れる鉱山でな。

ある時、採石中に遺跡が発掘されてしまって、閉山する事になったんだが。」

遺跡は、ぽつかりと開いた巨大な空洞の中に、ぽつりと建っていた。何かの入り口のような建物で、奥に続いているようなのだが、探索は十分にはなされず、先代の当主が山への立ち入りも禁止してしまつたらしい。

「何かあつたんでしょね。」

ウォルフが淡々と言うと、ドルトムントがにやりと笑った。

「そのとおりだ。」

ある日、先代の当主の手記を見つけ、その時の記録を読んだんだよ。」

そこには、こう記してあった。

遺跡の扉には主がいる。

主は太古からこの遺跡を護っていたのだ。それを私たちが起こしてしまつたのだ。

主は水を纏い、光を纏い、怒りを纏う。

怒りに沢山の傭兵が死んだ。

怒りは抑えられぬ。

この遺跡は眠らせねばならぬ。  
この山は閉じねばならぬ。

「…主…。」

アルバインが繰り返した。

「そう、主だ。」

私は”水竜”ではないかと推測しているがな!

今まで上げっぱなしだった眉をぐいっと上げて、ドルトムントが  
目を見開いて笑った。

「そこへ行けと?」

ウォルフの問いにドルトムントが頷くと、

「バツカじゃねえの?」

とミンミが吐き棄てた。隣に座っているアルバインは大層慌てて  
いる。アルバインの目の前に座るリチュモ、両手をそわそわさせて  
慌てている。

「なんだと…?」

「ミン…ミンミい、やめっぺ…。」

「バカだっつってんの。」

山を閉じなきゃならねえほどの何かがいたんだろうが。そこをわ  
ざわざ開けんのか?」

「そうとも。それほどの何かがあるのだ。絶対に価値のある遺跡に  
違いなかるう!」

「その考えがバカだと言ってんだよ。」

あたしらが失敗した時の事は考えてねえんだろ?」

「ミンミい…。」

「ほう、失敗するの!」

「つくづくバカだな、アンタ。」

リスク管理出来ないのかって聞いてんだよ。

当時何人入ったか知らねえが、少なくともあたしらよりはいただ

ろうよ。

その人数が死んだんだろ？ あたしらが失敗する可能性だってあるじゃねえか。」

「なんと、弱腰だな。そんな傭兵はいらんなあ。」

ウォルフガング、この猫の代わりにもっと腕の立つ傭兵を探して連れて来い。」

ミンミの神経をわざと逆撫するように、ドルトムントがにやついで言ったので、ミンミがテーブルを蹴り飛ばして立ち上がった。

「なっ…！」

「やめるミンミ。」

勢いよくドルトムントを見たミンミを、ウォルフが静かに嗜めた。どこまでも逆らえないのか、ミンミの勢いはみるみる萎んで、俯き気味にウォルフを見た。

「んだよ、ウォルフ…。コイツの味方すんの？」

「敵、味方の話じゃない。そういう事も含めて、探索に行けと言う依頼だ。違いますか、サー・ドルトムント？」

ウォルフが横目に見ると、ドルトムントは満足そうにニヤけ、頷いた。

「噂通りのようだな。部下は馬鹿だが、リーダーの質はいいようだ。」

馬鹿と言われ、ミンミが再びドルトムントを睨み付けた。

「ミンミ、座れ。口を出すな。話が出来ない。」

ウォルフがゆっくり言うと、ミンミは再度しよぼくれて、唇を尖らせてソファに座り込んだ。

「サー。彼女は私の部下ではなく、頼りになる仲間です。」

探索は、彼女も連れて行きます。

一先ず、様子を見るために一度遺跡へ向かいます。

もう少し詳しい情報があれば、窺いたいのですが。」

ウォルフが言うと、ドルトムントは件の手記をウォルフへ差し出した。ウォルフは無言でそれを受け取り、ぱらぱらと捲った。

「仕事が終わるまで、預かせて頂きます。」

「好きにするがいい。」

ああ、それから、部屋を宛がおう。外に執事を待たせてあるから、声をかけるがいい。」

「はい。」

探索の結果、必要なものがあつた場合には……。」

ウォルフが言いかけると、ドルトムントが面倒くさそうに言った。

「ああ、ああ。」

何でも言う方がいい。金なら幾らでも出す。

報酬は、依頼状に書いた額でいいんだな？」

「はい。十分です。」

ウォルフが頷くと、ドルトムントは片眉を上げて少しだけにやりとし、部屋を追い出すように手の甲を振った。

執事に案内された部屋で一晩休み、翌早朝に裏山へ探索に出る事となった。

紅一点のミンミには一人用の部屋が宛がわれ、その他の三人には二部屋続きの少し大きな部屋が用意された。

就寝までの間、男三人の部屋で打ち合わせをする。

「あのおっさん、意外にロマンチストなんだな。」

ミンミがベッドにがさつに横になりながら言った。

「うん？」

「だってよ、何を言うかと思えば、『竜』がいるかもってよ。」

そう言つてケタケタと笑う。

「んだなあ。確かになあ。」

少し天井を見上げて考えた後、アルバインが苦笑した。

ヴェル・ヴィーラには、ヒトが生まれる前、この世界を治めていたのは『竜』だという言い伝えが存在する。

古文書の多くに書かれている事で、一般的には事実とされ、存在も信じられてはいたようだが、今では信じる者も少ない。

「化石すら見つかんねえもんなあ。」

「今じゃ、想像上のイキモノだぜ。」

面白がって笑うアルバインとミンミを見ながら、窓辺に座っていたウォルフが苦笑した。

そしてすぐに、ドルトムントから預かった手記を開く。

多少茶色く焼けた手記は、ところどころインクも剥げてしまい読みにくくはなっているものの、状態としては良く、読む分に不都合はない。

ウォルフは丁寧に一ページ一ページめくりながら、手記に目を通した。

手記には、今から二〇年ほど前の”一年の始まりの日”から、二年後の”一年の終わりの日”までの出来事が詳細に書かれていた。

ざっと見た限りでは抜けている日付はなく、件の裏山の出来事は手記のちょうど三分の一程度めくった場所にある。ドルトムントの仕業か、ページの端に折り目があった。

手記に依ると、裏山の出来事はドルトムントの話通り、黒鉱石の採掘中に偶然遺跡の建つ空洞を掘り当てた事が切欠のようだった。

ウォルフはその日の記述をゆっくり読み進めた。

V・D・4902 一年の始まりから九二日

朝、採掘現場を任せられた職人が屋敷へと飛び込んで来るなり、私を山へ来るよう急かした。

彼は大層慌てて居て話の要領を得ず、私は仕方なく山へ向かった。道中に落ち着きを取り戻した彼から聞いたところに依ると、どうやら掘り進めていた横穴の先に空洞が現れたという事であった。

単なる空洞であるならそれほど慌てる事もなかるうと、私は鼻で笑ったが、実際に現場へ到着するなり、私は言葉を失った。

横穴の先に突如現れた空洞はかなり大きなもので、中は漆黒の闇に満ちていた。

光を入れながら中を覗き込むと、採掘の横穴は空洞の天井付近だったが、不思議な事に、脇には横穴から空洞の下へ向かうように石階段があった。

階段はかなり風化し、崩れてしまっている段もあったが、どうやら空洞の下まで降りられるようであった。この横穴は偶然掘り進めた穴だというのに、何故このように測ったように寸分のズレもなく横穴から綺麗に階段があるのか疑問ではあったが、私は直ちに屋敷へ戻ると、別件で雇っていた傭兵十一名に空洞を探索するよう命じた。

探索には私も加わり、崩れかけた階段を下った。

採掘穴を照らす松明とオイルランプを数個用意したにも拘らず、足元を照らすので精一杯で、空洞は黒一色であった。光は階段横の壁以外の壁を照らす事なく闇に吸い込まれている。余程大きな空洞なのであろう。

中は遠くの方から水滴の滴る音と風の舞う音が微かに聞こえるだけで、私達の足音以外は何も聞こえなかった。

どれほど下っただろうか。随分と下った階段が、ついに終わった。空洞の下に到着したようだった。

傭兵のリーダーであるトールズの提案で、全員で一緒に行動する事となり、トールズが左手に松明を持ち、右手で壁に触れ、壁伝いに空洞を回る事となった。

壁を右手に暫く進むと、やがて闇の向こうで柱のような何かが浮かび上がった。

徐々に歩みを進めると、目を見張るほど巨大で美しい遺跡が姿を現した。

遺跡は空洞の奥に、壁に食い込むようにして建てられた状態であった。素材は山のものとは明らかに異なる石を使い、まるで掘り削ったかのように、部位と部位の間に継ぎ目がなかった。



正面には柱が六本聳え立ち、屋根を支えていた。その奥には天井付近まである大きな扉があり、何やら見た事もない模様が彫り刻まれていた。

「気になるものでもあった？」

いつの間にか目の前に座っていたリチュが、ウォルフに声を掛けた。

「ああ…。」

ドルトムントの先代が事件のあった日の事を詳しく手記に記している。

中々いい前情報になりそうだ。」

ウォルフがそう言うと、アルバインとミンミが大笑いをした。振り向くと、二人はどうやら雑談に花が咲いたようだった。ウォルフとリチュは顔を見合わせ、揃って肩を竦めた。

「手記にはなんて？」

リチュが訊ねると、ウォルフが少し小さめの声で手記を朗読した。

トールズが扉を調べる間、私たちは少し離れた場所で彼を待つよう言われた。今思えば、彼は何か知っていたのかも知れない。トールズは灯りを持つ補助を一人だけ残し、私を含む一行の残りは十歩ほど後ろへ下がるように言われた。トールズが扉を調べる様子を、闇に浮かぶ光の玉のように浮かび上がったランタンの灯りが照らした。トールズは丹念に調べていた。そして私に振り返り、こう言った。

「ここは、このままにして、穴を塞ぎましょう。山も閉じた方がいいです。」

なんとという事を言う！この山は、ドルトムント家そのもの！閉山は家の衰退を意味するのだぞ！

私は頭に血が上ってしまった。今ならば、それが愚かな思考である事は赤ん坊でも解るのに、その時の私は無知だった。

私は彼に硬く首を振り、扉を開けるよう指示した。

彼も私と同じように硬く何度も首を振った。何かを察したトールズの仲間が彼に理由を問いかけたが、彼はそれにも答えず、ただ首を振るだけだった。

好奇心からか徐々にトールズの仲間が私に賛同し始めた。財宝でもあれば報酬が上がると考えたからかも知れない。やがて、トールズは肩を落とし、苦悶の表情を浮かべながら、仲間に装備を整えるよう言った。そして私には仲間の何人かを付けさせ、階段の脇にいろよう言った。すぐ逃げられるように、という事なのだろう。私に付けた仲間には、癒しと魔に封を施す事の出来る魔道士がいた。

私たちが階段の脇にたどり着くと、トールズが再び扉を調べ、両手を扉に掲げた。トールズの指示だったのか、灯りを持つ補助が、灯りをトールズの足元へ置いて後退した。

そしてすぐに、トールズが何かを唱えながら叫んだ。

何を叫んだかは聞き取れなかった。

トールズの唱える言葉と声に答えるように、扉の刻印から青白い光が溢れた。光は最初は無秩序に溢れ、徐々にトールズという言葉に同調するようにまとまっては散らばり始めた。まるで、踊っているようだった。

それを見ていた癒しの魔道士が、小さな声で何かを呟いた。見上げると、とてつもない愕然とした表情でトールズを見射っていたが、やはり何を呟いたかは聞き取れなかった。

再びトールズへと視線を戻した私の目に映ったのは、トールズという言葉に併せ踊っていた光が、おぞましいほどに増大していた様子だった。光は尚もトールズの声に同調し、蠢いていた。

そして、キンと鼓膜を引き裂くような音とともに突如鋭く、場にいろ全員の世界を射抜いた。目の眩んで壁に手を突いてよろけた私を、次の瞬間、誰かが引つ張った。

「逃げて！」と言う声は、癒しの魔道士の声だった。

声の主は私を引つ張って階段を登りはじめた。訳も解らず、視界も焼けたままの私は、足が纏れながら階段を登ったが、耳鳴りの止まない私の耳には、下の階に残っていた傭兵たちのどよめきと、恐怖の叫びが聞こえていた。次いで大量の水が揺れたような”トプリ”と言う音が聞こえ、次の瞬間、トールズが「逃げろ」と叫んだ。癒しの魔道士に引き摺られるように階段を昇り、横穴へ押し出された私は、よろめいて倒れたまま、暫く立ち上がる事も振り返る事も出来ずにいた。

横穴に残って中を窺い見ていた作業員たちのざわめきに混じって、背の横穴から”ごう”とか”ざあ”という轟音とともに、傭兵たちがトールズの名を叫ぶ声が聞こえていたが、体がいう事を聞かなかった。

だがすぐに、轟音の隙間から大勢の駆け足が聞こえた。傭兵が階段を駆け上がってきたのだろう。口々に「逃げろ！」「早くしろ！」と声を掛け合っていた。

私を連れて来た癒しの魔道士も「早く！」としきりに叫んでいたのを覚えている。

やっと横穴を振り向く余裕が戻って来た。空洞から逃げ帰って数分という短い時間であった筈だ。その時、空洞から逃げてきたばかりの傭兵が、私の腕を掴んで無理矢理立ち上がらせた。

「走れ！」と傭兵が私に叫んだ。周りの作業員にも叫んだ。

そのあと何が起きたのか、私の記憶も、ここに記すほど定かではない。

傭兵に手を引かれ、私は空洞を振り返った。

癒しの魔道士が逃げ帰ってくる傭兵に、治癒魔法をかけながら横穴へと誘導していた。しかし、やがて最後の傭兵が穴へ出た時、なんと癒しの魔道士が内側から穴に封術を施したのだ。

今、記憶を辿って思い出してみても、その封術は私を知る中で一番強力な封印術であったと思う。

逃げながらも尚振り向いていると、封紋の向こうで、癒しの魔道士がこちらに背を向け、杖を翳したのが見えた。

そして、次の瞬間。

癒しの魔道士の体が、物凄い勢いで封紋に叩きつけられた。その体の向こうには、大きな牙にトールズの体を刺して口を大きく開ける、”水竜”の顔が見えた。

”竜”…！？ 想像上の生物ではなかったのか？ 私は夢を見たのか？ 何か強大な力の光を、竜と間違えたのか…？

暗闇の中、封紋から溢れる光に照らされ、恐ろしく美しく青白く輝く”竜”は、封じの壁を突き破れなかったのか、水のように透き通った体をうねらせ、トールズの刺さった牙に癒しの魔道士の体を突き刺し、消えていった。

「”水竜”…。」

リチュが真剣な顔で手記を見つめていた。

「本当にいるんだべか…。」

雑談に飽きたのが気になって来たのか、アルバインとミンミも、リチュとウオルフの足元に座って深刻な顔をしていた。

「ウオルフ？」

リチュが呼んだ。

「ん？」

「原種エルフィには、『雨乞いの唄』という歌があったよね。」

「ああ。」

「ボク、傭兵になったばかりの頃にお世話になったエルフィの村の長老から、『雨乞いの唄』はある長い長い唄の一節で、この歌自体は”水竜”の目覚めの歌なんだと聞いた事がある。」

ボク、エル・アムルを信仰している訳ではないし、エル・アムルの聖書にもそんな話があったから、てっきりお説教かと思って聞き流してしまっただけだ…。」

「…その村は、どこに？」

「ゴルタダの近くだったよ。大きな村だったし、まだあると思う。」  
「ゴルタダか。」

ゴルタダは、カストダル大陸の南に位置する、ガルルダ大陸西部、エルフィ種の国マルレイン王国の大都市だ。

ガルルダ大陸にはミルグ王国とマルレイン王国が隣り合って位置しており、ほぼ中心には永世中立を謳うルーン共和地区という地区がある。そのルーンとマルレインとの境目にゴルタダがあり、その周辺には農村地区が広がっている。リチュの言う村は、その農村の一つだという事だった。

「南に行ったら、寄ってみるか。」

「んだな。この先、何かの役に立つかもしんねえし。」

ウオルフの提案に、リチュが頷き、アルバインも賛成した。その横で、ミンミは一人、深刻な表情のまま俯いていた。

「腹減ったか？」

アルバインがミンミを覗き込むと、ミンミが急に顔を上げ、序でに右の拳を振り上げた。

「てめえ！」

「じ、冗談だ！ 悪かったっぺ！」

ひょいと飛び退きながら、アルバインが笑った。

「そろそろ休むか。」

ウオルフが立ち上がると、みなも一様に頷いた。

「んだなあ。明日早いつぺ？」

「ああ。日の出前には屋敷を出たい。」

「解った。」

そう言つと、各々散つて、あつという間に眠りに就いた。

## 戦火の火種 2

翌朝、早朝。

各人が目を擦りながら屋敷のエントランスに集合した。

「偉いな、ちゃんと起きられて。」

そう言いながら、ウォルフが笑った。

「子供じゃねえっぺ」と言いたいところだがや、よく起きられたと自分でも感心したべ…。」

「ボクも。」

アルバインとリチュが苦笑した。

「ゆっくり行こう。」

ウォルフが腰の道具袋に手を入れながら言った。そして袋から羊皮紙を取り出すと、裏山と紙を見比べた。

「執事の人から地図を借りた。裏山は私有地だし、今は閉山しているんで、この屋敷にしか地図はないそうだ。」

「私有地なれど、ケモノはいるってか？」

ミンミが片眉を上げて言った。

「いるだろうな。気を抜かないでくれ。」

一同の顔を丁寧に見回して、ウォルフは歩き出した。

屋敷の脇にある径が、裏山へ続いている。屋敷の裏手から山へと伸びており、この道のある山の裾野には、岩肌の山を覆うように草木が生い茂る森が広がる。

「人工的に生やしただな。」

アルバインが言った。

「そんなんわかるの？」

ミンミが訊ねると、アルバインは笑って言った。

「んだ。間引きしてあつぺ。ホレ、あの辺り。」

そう言っつて、アルバインが森の中を指差した。指先には、比較的若い細い樹木が並んで伸びていたが、葉がぎっしりと空を覆い、土

には日が当たっていなかった。

「自然の木は、あんなビッチリ並ばないべ。他んとこの木と木の間も、間隔が不自然だべ。」

「この辺りは、土に栄養はあるのに、何故か木が生えない地域だったそうだよ。」

リチュユが、短い脚で一息懸命、デコボコの山道を歩きながら言った。

「海に近いから、海風が多くて、種が運ばれて来ないんだって。だから川べりには植物は沢山生えるのに、少しでも起伏があったり、水の流れがない場所には、植物が生えない。」

この山は、鉾山らしいから別だろうけど、山裾にも何も生えないのは、そういう理由があるらしいんだ。」

「そうだか。そういえば、エルフィの国は緑豊かだなあ。」

「熱帯地域を含むからじゃないかな。風の行き来も多いから…。」  
話ながら、アルバインとリチュユはウォルフを追い越して行った。

ウォルフは呼び止めようとも思ったが、この辺りはケモノの出る場所でもないし、山までは一本道なので、そのまま行かせる事にした。振り向くと、ミンミがとぼとぼ歩いていた。いつもの破棄がない。

「ミンミ？」

呼ばれて、ミンミがウォルフを見た。

「うん？」

返事をしたが、ウォルフは穏やかな表情を浮かべた顔を少しだけ傾けて、ミンミを見るだけだった。

「行けるか？」

「うん、行けるよ。大丈夫。」

ミンミはそう言って笑ったが、やはり破棄がなかった。

「リチュユの話…。」

「ん？」

「『雨乞いの唄』の話。」

「ああ。」

「トールズは、あの唄の続きを知ってたんだな…。」

「…続き？」

「うん。」

ミンミはそこで口を噤み、それ以上話をしなかった。

『雨乞いの唄』は、エル・アムルの偉業を唄った唄である。

乾いた地だったこのカストダル大陸に緑の恵みを齎したエル・アムルは、カストダル大陸のみならず、今やこのヴェル・ヴィーラの創生神の一つとして崇められている。

大天使を神として崇める事実には違和感こそあれど、そして信仰するまでには執心せずとも、ヴェル・ヴィーラに住まうヒトビトはみな、エル・アムルを讃えている。

そんなエル・アムルに関する唄ならば、『雨乞いの唄』以外にもあってよいものだが、不思議とエル・アムルの唄はこの『雨乞いの唄』以外には存在しなかった。それについて、『ミンミならば知っているだろう』と思ったが、当のミンミは話したくない様だった。

ミンミは、“水竜”の話聞いてから、ずっと破棄がない。憎まれ口も余り叩かないし、普段ならとくに出ている「いきたくねえ」「めんどくせえ」の一言も、今日は聞いていない。

ウォルフは少し考えて、ミンミの肩を歩きながら抱き寄せた。互いの装備がぶつかって少し邪魔になり、歩き難くなつたが、お構いなしにウォルフは、ミンミの頭に自分の頭を乗せ、肩を抱いていた手でミンミの頭の上に生える耳を触って撫でた。

「…村を出ても、エル・アムルからは逃げられない…。」

ウォルフの耳元で、ミンミが呟いた。

「どこへ行っても、アレがいる…。」

ミンミは、エル・アムルから『逃げる』ために、傭兵になった。

だが、この世界においては、どこへ逃げても必ずエル・アムルの名を聞き、唄を聴き…。今では逃げる事すら、無意味になってしまった。「あと少しの辛坊だろ…。」

ウォルフが耳に触れていた手で、ミンミの頭をぼんぼんと優しく



叩いた。

ミンミはその振動で、喉まで出掛かっていた愚痴が落ちて行くのを感じて、ふと肩の力を抜き、頷いた。

「…うん…」

神が産み落としたのは、何も無い世界。  
ただ彷徨っただけの世界。  
落胆して壊れた破片で、命は産まれた。

しかし世界のように、命たちの手にも何も無く、  
命たちはただ、彷徨う。

やがて命は知る。

世界に、命に、必要なものがある事を。

命は乞う。

世界を潤す、命を潤す恵みを。

そして恵みは与えられた。

命を育てた手によって。

そして手は言う。

幸あれ、と。

不意に、森が拓けた。

左右へ大きく延びる山裾の前には、明らかに人の手によって樹木

が切られた円形の広場があり、背の低い雑草に覆われた地面擦れ擦れに、入り口と思しき大きな穴が見えた。穴からはトロツコ用の線路が食み出していて、しかしその線路は草の広場に出るなり、草に侵食され、錆付いて使い物にならない状態になっていた。

「黒鉱石の流通が一向に増えないのは、これが原因かね？」

ミンミが言った。

大昔には武器や防具を始め、船や家、城などにも使用していた黒鉱石は、近年その流通量の少なさから高騰し、高級素材として取り扱われている。目の前の鉱山は大きい。恐らく採掘量も膨大な量であつた事だろう。

「忍び込んで無断で掘る輩がいるんでねえべか？」

「それはないんじゃないかな。」

アルバインに答えながら、リチュは右の人差し指を親指に引っかけ、弾いた。リチュの指先から、穴目掛けて小さな光の珠が飛んだ。その光が穴に入る瞬間、穴を塞ぐ様に青白い光の壁が現れ、珠を粉々に砕いた。

「封術がしてある。魔封というよりは、進入者避けの軽いヤツだけども、普通の傭兵には解除出来ないんじゃないかな。」

スタスタと穴に歩み寄って、リチュが少し背伸びをした。穴の上を見つめている。が、どうにも少し背が足りないようだ。それを察したウォルフが、リチュを抱き上げた。

「ごめん。」

罰が悪そうに、リチュが照れ笑いをした。ウォルフがにこりと笑い返す。

リチュは視線を戻して穴の上を見つめた。穴の上には、注視しなければ解らないほど小さく、何かが彫り刻まれていた。

「うん、封紋だ。」

「解除出来そうか？」

「出来ると思う。」

それを聞いて、ウォルフがリチュを下ろし、何歩か下がった。ア

ルバインとミンミも、ウォルフに倣ってリチュとの距離を開けた。

リチュは三人が十分に離れた事を確認すると、両手を前に翳して目を閉じた。そして両手の指先で幾つかの形を作っては解いてを繰り返している、リチュの足元で風が舞った。風を感じ取ったリチュは、少し鼻で息を吸い込み、ゆっくり開封の言葉を唱える。

「『封契約の履行を求むるオルダ・リリス』…。」

リチュの言葉に応える様に、封紋が光った…が、光は矢のように鋭く尖り、リチュ目掛けて噴出した。

「！」  
「『護バルア』！」

ミンミが反応すると同時に、リチュが翳していた両手で空に素早く円を描いた。保護の言葉と同時に円には淡い緑色の光の壁が出来、光の矢を跳ね返す。が、矢は次々リチュへ向けて放たれる。

「頑固だのう。」

アルバインが杖を握った。

「待つて。」

リチュが、アルバインを制した。と同時に、リチュの足元の風が一層強く舞った。風が舞うにつれ、リチュが手を翳す光の壁は強烈に光輝き出す。そして、矢が途切れたほんの一瞬を狙い、リチュが翳した両手をパンと勢いよく合わせると、壁は瞬時に珠となった。

「『絶対履行を命ずるコマン・リリス』…！」

絶対開封の言葉を唱えたりチュが素早く両腕を広げると、珠は勢いよく封紋にぶつかつた。

パリン…。

封紋はガラスのような音を立てて割れ、崩れ落ちた。地面に落ちた封紋の欠片は、風に吹かれて舞い、消えた。

「…リチュは何で騎士に職替えしたっぺ…？」

呆けた顔でアルバインがリチュに声をかけた。リチュは後ろ斜め上に振り返って、にこりと笑った。

リチュは元々、封術、攻撃術、治療術、保護術、総ての魔術を操

る事の出来る、優秀な魔道士として名高い傭兵だった。『リチュリ  
ー・リチュ』と言えば、一時は誰もがその存在を認識出来るほどの  
知名度と実力を誇る傭兵だったのだ。

ウォルフとパーティを組む少し前に、リチュとアルバインは知り  
あった。だが、その時はすでに、リチュは騎士として傭兵をしてい  
た。

「なんでだっけ…。忘れちゃった。」

あっけらかんと答えるリチュに、アルバインがゆっくり首を振っ  
た。

「絶対履行”を使える魔道士は、そうそういなえべ。魔道士とし  
ちゃ、ホントに貴重な人材だっぺ。」

騎士としての実力も認めるが…、もったいねえべさ…。」

残念がるアルバインに、リチュはもう一度笑った。

「いざとなったら、両方使って役に立つよ。」

「んだあ。リチュはすげえべ。」

アルバインは自分の事のように、胸を張って笑った。

「さあ、行こう。外から封がされていたんだ、中にケモノが入る事  
はなかっただろうが、中のケモノも外に出していない。中で妙な進化  
をしているケモノもいるかも知れない。用心してくれ。」

鉱山は暗黒系のケモノが多いから、シャヌラル：タルク純白系やシャヌラル：ヒュアルタル：ソレイユ光属性の武器か術を  
使う事。」

ウォルフが指示をすると、各々が短く同意の返答をした。

ヴェル・ヴィーラには、タルク暗黒・ピュアル純白・ストレム黄土・ファイタ紅蓮・ウォルタ紺青・エアル碧緑と  
いう合計六つの系統と、それを二分するソレイユ光・ソイタル闇という属性が存在す  
る。

それぞれに意味があり、黄土は地、紅蓮は炎、紺青は水、碧緑は  
風を司り、黄土は紅蓮によって焼かれ、紅蓮は紺青によって鎮火し、

紺青は碧緑によって流れを妨げられ、碧緑はその流れを黄土によって支配される。暗黒は翳、純白は灯だ。また、系統にはそれぞれを司る女神がいるとされる。

そしてこれらを支配する属性が朝である光と、夜である闇である。「封術は、ぱっと見ただけでは、どの属性で封がされているか解らない。だから、解らない時は純白系の力を少しづつ付けてみる。そうすると、吸収されれば純白系の紅蓮か碧緑だし、弾かれれば暗黒系の黄土か紺青になる。あとは、その瞬間の光の色を見ればいい。赤く光れば紅蓮だし、青く光れば紺青だし…。」

アルバインに強請られて、道中リチュが封術について解説をしていた。

「さっきのは？」

松明を片手に振り向きながら、ミンミが言った。

「入口の封は青白い光だったから、紺青系だよ。封紋を見ても解るけど。さっきのは少し風化しちゃってて見辛かったんで、最初に純白系を飛ばしてみたの。」

「ふうん…。私はやっぱり魔道士向かねえわ！」

そう言って、ミンミが笑った。

「頭使わなきゃいけない事は、したくない。」

「あはは。誰が見ても、ミンミには無理だっぺね。」

調子に乗ってアルバインが同意すると、ミンミはアルバインをじろりと睨んだので、アルバインが肩を竦めて苦笑した。

「自分で言っただっぺ…。」

思いの外しょぼくれたので、ミンミがしてやったりと、にやりと笑った。

「でも、アルバインもリチュと同じように魔術を使うだろ？ それは素直にすげーと思う。」

「んだな事ねえだ。オラ、リチュには本当に敵わないっぺ。」

オラにはまだ、不得意な系統があるもんなあ。」

「不得意？ 得意不得意があんの？」

「そら、あるべ。」

オラの場合は、紅蓮系が下手糞なんだべ。でも、リチュはなんでも使えるっぺな。」

アルバインが言うと、リチュが苦笑して「そうでもないよ。」と言った。

「ボクも、暗黒系は苦手なんだ。」

「んあっ！」

リチュの言葉に、アルバインが手を叩いて変な声を上げた。

「そうか、それでリチュは騎士だっぺ。」

「どついう事？」

ミンミが訊ねると、一番後ろを歩いていたウォルフが答えた。

「ジョブ：ウォルファ戦士系は魔道士と違って、得意とする属性や系統に応じて向き不向きがある。」

騎士は純白系や、光属性の扱いに特化している者しかねない。

ミンミがモンク系を習得したのは、暗黒系や闇属性を得意としているからだ。」

「そうなの？」

「そうだよ。」

キョトンとするミンミに、リチュが笑った。

「大抵は、戦士系の向き不向きも系統や属性の力加減に沿って出るんだよ。」

だから、暗黒系が苦手なボクは純白系が得意だし、暗黒系が得意なミンミは純白系が苦手な筈だ。」

でも、中にはオールマイティに使いこなせる人もいる。

ウォルフみたいだね。」

と、リチュがウォルフを振り返った。

「俺にも不得意はあるよ。」

ウォルフが手を振って答えた。

「そつただ事ねえっぺ。リチュには敵わなくても、ウォルフも相当センスあっぺね。」

魔道士としてもやって行けっぺ。」

「そうだね。ウォルフが凄いとされるのは、ジョフ・マジッサ魔道系も戦士系もこなせるからだからね。」

「んだあ。オラ、ウォルフと出会う前にいた村で、ウォルフが魔術も武術も使って『顔のない者』を倒したって噂を聞いたものだ。」

「たまたまだよ。それに俺はウォルマジッサ魔道騎士にはなれない。」

「いやあ、頑張ればいつかなれっぺ！」

魔道騎士は、魔道士が操る封術、攻撃術、治癒術、保護術と、戦士が操る武器を使いこなして初めてなれる、ヴェル・ヴィーラ最強の傭兵である。傭兵はそもそも、魔法か武器を扱う事が出来なければならぬ。武器ですら、例え刃がついていても、ただ振っただけでは物を切る事は出来ない。必ずその武器にあった属性を使う事が出来なければ、武器を手にしても意味がないのだ。

武器を扱う方法と、魔法を扱う方法は大きく異なる。それ故、双方を操れる者は多くない。

さらには、魔道士としても戦士としても、総ての系統と属性を扱う事が出来なければならぬ。

だから、魔道騎士は究極の傭兵と言って過言ではなく、傭兵なら誰もが憧れるものなのだ。

若干興奮気味に言うアルバインが、前のミンミにぶつかった。

ミンミは立ち止まって、耳をぴくぴく動かしている。

「リーダーを煽ってる場合じゃいかもよ。」

一向はいつの間にか、大きくも狭い横穴の途中にぽっかりと開いた広間に出ていた。

朽ちかけた木のテーブルや椅子が散乱し、壁沿いに置かれた樽や木箱からは、保存食を入れてあったのであろう布袋やコルクがしたままのビンが食み出ている。

「労働者たちの休憩所みたいところだったんだべなあ。」

「道、別れてるね…。五本か…。」

耳を澄ますミンミの邪魔をしないよう、アルバインとリチュは小

声で喋りながら辺りを詮索した。

「その道のどれかから、唸り声が聞こえる。

でも、反響しちゃって特定出来ない。」

ミンミが眉を顰めた。

「狭い横穴では出くわしたくないな。」

ウォルフが言いながら、執事に借りた鉱山内部の地図を取り出した。

ミンミが歩み寄って、地図を松明で翳した。脇から、アルバインとリチュが覗き込む。リチュは、アルバインが抱き上げている。

「鉱山の地図なんか作ってたんだね。」

「ああ。迷路みたいな場所の地図を、よく作ったものだよ。」

「この途中で道が切れてる横穴が、例の空洞のあった横穴だろうね。」

「他の道の途中にも広場はあるみてえだが、出来ればこん中では、

何にも会いたくねえっぺ…。」

鉱山内部はしっかりとっているため、落盤などの危険はなさそうだが、何せ狭い。

武器や魔法を心置きなく使えるほど、余裕のあるスペースではないから、戦闘になったところでどのような誤算が生じるか検討もつかない。

さらには黒鉱石は闇属性の素材のため、ケモノが持ち合わせる属性と一致し、ケモノの力を増幅させている。

そして追い討ちをかけるのは、ミンミが手にしている松明以外、灯りが無い事だ。照明をキープしながら戦闘をする事は困難だ。

「よし、比較的横穴が広いのも空洞への道だし、このまま進もう。

いざとなったら、横穴の途中に封をしよう。リチュ、その時は頼む。」

「うん。」

「ここから先、空洞へは右端の横穴を進む。途中三つ、今いるような広場がある筈だ。可能なら、そこで休憩をしながら進む事にする。



先頭は俺とリチュ、後方にミンミとアルバイン。」

「うい。」

「おっしゃ。」

「はい。」

三人の返事を待って、ウォルフは地図を仕舞い、歩き出した。

ミンミから受け取った松明を手に、ウォルフとリチュは横穴を進んだ。背後にはアルバインとミンミが続く。地図の通りならば、あと三十分ほど歩けば空洞に辿り着く筈だ。

「リチュ。」

ウォルフが前方に広がる闇を見据えながら、リチュに声をかけた。

「うん？」

「『雨乞いの唄』の続き、唄えるか？」

「…え？」

唐突に訊ねられた言葉の意味を理解するのに、少し時間がかかった。

「『ツールズはあの遺跡の前で、『雨乞いの唄』の続きを唄ったようなんだ。」

「それで、『水竜』が出現したと？」

「憶測だけだな…。試すにはリスクが大きすぎるが、タイミングがあれば、試してみたい。」

「う、ウォルフ…。」

リチュが慄くと、ウォルフが慌てて訂正した。

「勿論、危険性については十分理解しているつもりだ。だから、何も今日これから、という事ではない。」

「…。」

リチュが俯いた。

ゴルタダのあの村で、確かに聞いた記憶はあった。だが、今思え

ば明らかに、冒険者として適切ではなかったと解るが、あの時は本当に興味がなく、聞き流してしまった。

ささやかながら残っている記憶の断片を繋ぎ合わせれば、適当に唄う事は出来るだろうが、恐らくこれでは、”水竜”の一件を再現する事は出来ないだろうと思った。

「無理だと思う。ごめん…。」

リチュが謝ると、ウォルフが小さく笑った。

「いや、謝る事じゃない。

俺は、『雨乞いの唄』に続きがあった事すら知らなかった。さつきミンミから聞いて、初めて知ったくらいだ。」

ウォルフが首を振ると、リチュが言った。

「白い民でも、『雨乞いの唄』に続きがあると知っている人は僅かだと思うよ。」

本当に、ヴェル・ヴィーラではエル・アムルを讃える唄は『雨乞いの唄』しかないと思われているんだから。」

「伝わらなかったんだと思うか？ それとも、伝えなかったんだと思うか？」

ウォルフが、静かに訊ねた。

ウォルフやリチュが属するエルフィ種でも、エル・アムルを崇める民は沢山いる。ヒュントにもミーヤにもエルフィにも伝わっていないものがあるのであれば、それは意図的に隠された事である可能性だってある。

だとするならば、手記にある”水竜”のような危険な何かが関係しているという推測も出来るし、それによって、この探索の方向性も変更する必要が生じる。

「エル・アムルの事で言うなら、伝えなかった事は山程あると思う。現存している史実や資料、唄だけが全てというには足りないと思うか…。」

「足りない？」

「うん。」

今や、ヴェル・ヴィーラを作ったのはエル・アムルとその他の神と言われるほどに、エル・アムルの存在は大きなものになっているでしょ？

でもその根拠としては、今ボクたちが知っている事だけでは少なすぎると思う。

そもそも、『その他の神』ってなんだろう？ それすら、情報としては殆ど残っていない。

大天使と言いながら、”最高女神”として崇められる理由が、どこかにある筈なのに、ボクたちが学校や本を読んで知る情報の中には、ないんだ。」

普段から慎重に、丁寧に言葉を紡ぐリチュが、いつにも況して言葉を選んでるのが、感じ取れた。

ヴェル・ヴィーラに住まうヒトビトは、白い民以外も、無信仰なれど決してエル・アムルの存在を否定する事はない。絶対的な創造神として意味づけられたエル・アムルは、この世界のその位置になくってはならず、そしてそれを疑問視する者もいない。

「みんなは気付かない。だって、気付く必要がないから。

『雨乞いの唄』に続きがなくなっただけで構わないし、これ以外に唄がなくなっただけで、何も困らない…。」

どこか、何か煮え切れない、というニュアンスを残して、リチュが話すのをやめた。

傭兵を始めて、村や町の外に出て、様々なヒトに会って、気づいた事がある。

それは言葉にならない疑問であり、その答えが見出せなくても生きるには困らず、だからそのうち忘れてしまう。だがその疑問は心の底で燻って、ふとしたときに思い出す事になる。

ウォルフが傭兵になるべく故郷を出て十年余り。いつしか心に抱いた、忘れていた疑問が、まだ心の中に燻っていた事を、リチュの言葉で知る。

### 戦火の火種 3

道中、結局ケモノには遭遇せず、一向は最後の広場に辿り着いた。この先を行けば、事件のあった空洞に到着だ。

が、広場に踏み込んだ瞬間、ミンミが身構えた。

「奥にいる。でかいやつだ。」

ミンミの耳が、びくびくと大きく動いた。

「どうすつぺ？」

「どうするか。おびき寄せるか。」

「それがいいかも。この広場、結構天井高いし。」

「ドでかいのが来たりしてなあ。」

「そんなときゃ、そんな時。」

広場の中で分散しつつ、釣り役はミンミが行う事になった。

リチュは、ミンミが連れて来たケモノを空洞に一番近い場所で見定める。四人の戦力で勝てないような相手だと判断した場合は、直ちに横穴に封術を施し、この場からも立ち去る。

広場の広さは、東西南北の直径がほぼ同等で十メートル強、天井の高さは五メートルというところだ。ミンミが壁蹴りをクッションにして高飛びをした場合の最高点が四メートル強である事を考えると、行動するにはギリギリの広さという感じであるが、ここより入り口までは連れないし、狭すぎる。

「行くよ。」

大槌を背負い、片手弓を構えたミンミが空洞への最後の横穴の前に立った。

ミンミの腕に鳥肌が立つ。

「いいよ。」

「OK。」

「じゅんぴおつけーだべ。」

各人の返事を待って、リチュがミンミに暗視補強術を施した。――

時的に暗闇で視界が利く様になったミンミは、ゆつくりと横穴へ入っていく。

松明を数本焚き、広場にあつた古いオイルランプにも火を入れて照明を確保した三人の視界から、ミンミが闇に溶けて消えてすぐにヒュツという弓を放つ音が聞こえた。次いで素早く走って引き返してくる足音と、それを追うように、ずん、ずんという足音が徐々に大きくなって聞こえて来た。

「来た。」

横穴を覗き込んでいたリチュが、自身にも軽い暗視補強術を施し、目を凝らす。闇の中で、必死に走るミンミと、その後ろからミンミをゆつくりと追いかけてくる得体の知れぬ”モノ”が見えた。

徐々に明瞭になる視界に、とうとうソレは見えた。

「ウォルフ、『顔のない者』だ。」

「いけそうか。」

「ど…、」

リチュが言いかけているうち、計算を大幅に早めてミンミが広場に逃げ込んで来た。次いで、やはり予想より脚の早かった『顔のない者』が姿を現す。

『顔のない者』は、漆黒の体に黒い靄がかかり、体の至るところに青白い光の筋が光っていた。馬のような脚の先は尖り、足先を地面に突き刺す事でバランスを取っている様子が伺える。名の通り、顔はない。顔と思われる部分には、五つの光が散らばっている。その光は、真つ直ぐミンミを捉えている。全長四メートル弱と言ったところか、広場が一気に『顔のない者』の容積で満たされたような威圧感は、今まで対峙した『顔のない者』とか比べ物にならず、四人全員が一步足を退いた。

「でけえ…！」

アルバインが叫んで杖を構え、保護術を唱える。

「『保護を求むるオルダ：カブルア：ウォルタ』！」

アルバインの言葉に杖の先が光り、四人の体の周りを青白く光る

風が舞い上がった。

アルバインの保護術を合図に、大剣を引き摺り持っていたリチュウが、力の強化を促す保護術を唱え始めた。

「『オルダ：プロブダ：エアル』：。」「  
加護を求むる

リチュウの言葉に、全員の武器が淡く緑色に光る。

その間に、既にミンミが壁を蹴って飛び上がり、ウォルフが『顔のない者』へ突進していた。

ミンミが天井付近へ一気に飛び上がり、降下の勢いに任せ振り下ろした大槌を『顔のない者』が腕で制し、その空いた脇をウォルフが切り込んだ。

スツ…という風を切る音が聞こえ、散った黒い靄に混じって、白い液体が噴出し、ミンミの顔にかかった。液体は柔らかかなのに鋭く、ミンミの頬を引っ掻いた。

「水風船か、こいつ…ッ！」

弾かれたミンミが壁に足を付き、再度天井へ向けて飛び上がる。

リチュウも、切り込んで一瞬背を向けたウォルフをカバーするように、反対側から大剣を振り上げ駆け出す。それに気付いた『顔のない者』が、視線をリチュウに移した。その隙を狙い、アルバインが攻撃術を唱えた。

「『矢を求むるオルダ：アルオ：エアル』っ！」

『顔のない者』へ向けた杖の先から、緑色の光が矢のように噴き出した。攻撃の気配を察した『顔のない者』が、青白く光る手のひらを炎に翳すと、光が水のように渦を巻き現る。その瞬間、視線が外れたりリチュウが地面を一気に蹴り上げ、大剣の刃にふっと息を吹きかけた。リチュウの息は白い氷の結晶になり、刃に纏わり付く。その大剣を、リチュウは『顔のない者』の首元へ勢いよく突き刺した。

ぐにゆり、と奇妙な音を立て、大剣が刺さった。思いの外弾力のある皮膚と肉が、剣に釣られて体の内側へ食い込み、『顔のない者』はよろけた拍子に手のひらをウォルフに向けた。噴き出た光がウォルフにかかる直前、素早く飛び寄って来たアルバインの保護術によ

る膜がウォルフを包み、光を弾く。

いつ消えたのか、霧の晴れた体は、水脹れを起こしたようにブヨブヨと膨れ、無数の小さな膿疱が白く光ながら浮き出していた。肌表面は乾き、ポロポロと細かく剥がれている。

『顔のない者』は、肩に着地し、尚も大剣を体の奥深く差し込むリチュを払い除けるように、腕を振り上げた。

脇が、空いた。

ウォルフがアルバインの膜を突き破り、剣を脇に構えて一気に『顔のない者』へ飛び掛った。振り上げた腕を戻す間もなく、ウォルフの剣が『顔のない者』に突き刺さる。

ぐにより。とぷり…。

肉が切れ、中の水が動く音が聞こえた。

痛みを感じるのか、『顔のない者』が振り上げた腕をウォルフ目掛けて思いつき振り下ろした。避け切れず、ウォルフが叩き飛ばされ、壁に体を撃ち付けた。

『ブブ…ブブブブ…ブブ…』

『顔のない者』が、風を震わせたような音を発した。体の膿疱が、ぱち、ぱちと弾け割れた。リチュがさらに大剣を深く差し込むと、『顔のない者』がもがいた拍子に大剣が肉を前後に裁った。右肩と首が体から外れかけ、青白い液体を噴出しながらぶらぶらと揺れた。「もういっちょ！」

叫びながら、ミンミが壁を蹴り飛び上がると、『顔のない者』へ真正面から飛び掛った。大槌を振り上げ、体を思い切り擦じると、反動に任せて一気に振る。大槌は『顔のない者』の顔面を叩いた。うしろに倒れる速さが、叩かれた頭部が後方へ持つていかれる速さについていけず、不安定にくっ付いていた肉が、ぶちゅぶちゅと音を立てて千切れて行く。

そして、一足先に地面に零れた肉片と頭部に覆い被さる様に、『顔のない者』の体が地面に倒れこんだ。

二三度びくびくと体が痙攣した後、黒い皮膚は塵のように粉々に

なり、地面に散らばった。

『顔のない者』の最後は、いつも黒い塵だった。ただいつもと違うのは、その塵が、風によって散り消えない事だった。

「どうする？」

ミンミが言うと、リチュが塵に歩み寄り、塵に手を翳して目を閉じた。

そして優しく、

「『コマン：ハイヴン』…。」

と呟くと、真っ白な風が塵をかき乱し、消し去った。

「やっぱり、『顔のない者』は闇属性なのかな？」

「違うよ。」

ミンミの声を、恐らく風が去っていった横穴を見つめていたり、リチュが、少し鋭く遮った。

「彼らは、光属性だよ。しかも、純白の。」

「どういう事だ？ 青白い光を放ったり、体の内部にも青があった。俺はてっきり、紺青系だと思っていたが…。」

「んだっぺ。だからオラも、碧緑系の保護術をかけたっぺ。」

「そうじゃないんだ。」

首を傾げるウォルフとアルバインに、リチュが小刻みに首を振って見せた。

「『顔のない者』は、『顔のない者』に肉を齧られる事でそれに変化<sup>んげん</sup>する。だから元々は『顔のない者』ではない”何か”だった。ボクが見て来た限りでは、生きている時の『顔のない者』の属性は、変化する前の属性に由来する。」

その証拠に、さっきのやつにはちゃんと碧緑系の攻撃が効いていたし、紺青系の保護によってダメージも和らいでいた。

でも、死んで塵になった後は違うんだ。闇属性のケモノの残塵は、『コマン・アビズ』でしか昇天させる事は出来ないのに、さっきのやつは『ハイヴン』へ還った。

ボクは気まぐれに『ハイヴン』を選んだんじゃなく、前にも『へ



イヴン』で昇天した残塵がいたんだ。だからずっと、『顔のない者』を昇天させる時は、『ヘイヴン』を使つてた。逆に、『アビシズ』で昇天した『顔のない者』の残塵は、ボクは見た事がない。」

リチュが困つた顔をした。否、哀しい顔、と表現した方が適切であるように、ウォルフには思えた。

「つまり、純白系の何か体が乗っ取つているかも知れない、と言う事か？」

ウォルフが訊ねると、リチュはもつと顔を歪め、泣きそうな顔をした。

「…解らない。ごめん、解らない…。純白系のケモノなんて、この世には存在しないと言われてた。だから、有り得ない事かも知れない。ボクの勘違いかも知れない。」

でも、ボクは『顔のない者』は倒すべき者ではない気がしてて…。訳わからない事言つてるかも知れない。ごめん…。」

俯いて首を振るリチュの脇に、アルバインがしゃがみ込んだ。そしてリチュの頭を捏ね繰り回す。

「謝る事じゃねえべ…。『顔のない者』の事は、誰も調べないつぺ。まだまだ謎だらけだ。」

だから、そこまで調べたりリチュは偉えだよ。

んだあなあ、ゴルタダに『雨乞いの唄』を調べに行った時、ついでにそれについても聞いてみっぺ。何か知っている人がいるかも知れねえべ。」

アルバインに倣つて、ミンミもしゃがみ込む。

「そうそう。それに、『顔のない者』に変化してしまうのは、ケモノだけじゃないだろ？」

ヒトだつてなっちまう。

もしかしたら、今倒したアイツは、元々ヒトだったかも知れない。そうだったら、『ヘイヴン』で昇天出来た事で、この世への蟠りも消えたかも知れない。

リチュは、今まで誰かを救つてたかも知れない。」

そう言つてリチュの頭を捏ね繰り回す二人を、ウォルフは少し複雑な心境で見下ろしていた。属性や系統について明るくない二人には気付けないリチュの言葉の意味に、気付いてしまったからだ。

最後の広場から、件の空洞までは、ものの数分で辿り着いた。だが、一行はそこで、暫し呆然と沈黙を余儀なくされる事となつた。

アルバインとミンミは、空洞へ通ずる穴の周辺に無数に散らばる、壊れた装備品のなれの果てに言葉を失っていた。しかし、リチュとウォルフは違う理由で息を飲んでいった。

「封がない…。」

最初に言葉を発したのは、リチュだった。

「え？」

アルバインが眉を顰めた。

「手記にあつた封の事？」

ミンミが訊ねると、リチュが呆然としたまま頷いた。

「おかしい…。あれは内側からした封だから、簡単に解ける訳ないのに…。」

リチュがゆっくり穴に歩み寄り、辺りを見回した。ウォルフも近づき、壁一体を見回すが、特に岩が削り取られたり、誰かが侵入した跡は見受けられなかった。

「リチュ。」

「…封術が破られると、必ずそうと解る跡が残るはずなんだけど、ここにはそれがない。」

「とすると？」

「どういふ事になるっぺ？」

まだ首を傾げるアルバインとミンミに、ウォルフが言った。

「内側から解かれた、と言う事だ。」

「内側から!？」

「んな筈ないべ!？」

ウォルフの言葉に、二人が食って掛かった。手記に依れば、内側に閉じ込められたのは”水竜”に食われたトールズと癒しの魔道士だけの筈だった。

ウォルフが手記を確認するが、皆に朗読をした後にも前にも、逃げ遅れた傭兵がいたという記述はなかった。

「記述しなかっただけで、いた可能性も…。」

「いたとしても、封術が綺麗に消える事は有り得ないよ。」

ミンミの言葉に、リチュはそう言いながら空洞へ足を踏み入れた。手記の通り、空洞内部は深い漆黒の闇に包まれ、一メートル先も見えなかった。松明に照らされるのは、穴周辺の壁と階段だけ。途切れた足場の先に道があるのか、それすら見る事は出来ない。

リチュは封紋があるであろう穴の上の壁を見上げた。暗闇で見難いが、封紋と思しきものは確認出来なかった。

「封紋がない。やっぱり、内側から解かれたんだ。」

リチュが言うと、横に立っていたウォルフが階段を一段下がった。遺跡まで降りよう。ケモノの気配もないし、恐らく危険はないだろう。」

言いながら、ウォルフは松明を持ってすたすたと歩いて行ってしまったので、三人は小走りに彼を追った。

階段は長く、時々段そのものが崩れ落ちていた。相変わらず灯りを反射するのは壁と階段だけで、他一切、闇に飲まれている。

こんなに深い闇は、四人とも見た事がなかった。

「光を吸い込んでるみたいだべ…。」

アルバインが呟いたが、皆その通りだと思った。

やがて階段が終わり、広く広がる岩床になった。床は多少の凸凹こそあれど、丁寧に削られた様子が伺えた。

「右回りで行ってたな。」

ウォルフはそう言うと、「じゃあ左回りだ。」と言って、左手を

壁に付け、歩いて行った。闇に浮かぶように遠ざかるウォルフを、三人が追う。暗いので、全員が固まって動いた。いつもより、距離も近い。

左回りに五分歩いた先で、漸く松明の灯りが壁と足元以外の何かを照らした。

それは手記にもあつた柱だった。

「遺跡……」

さらに歩くと、柱、扉、屋根、と徐々に闇から浮かび上がり、遺跡が姿を現した。

「大きい……」

「見た事ねえ様式だべ。」

見上げながら、リチュとアルバインが言った。

ウォルフは扉へ歩くと、松明を近付けた。手記にあるとおり、扉には確かに模様が彫り刻まれていた。そこへ来て、脇から扉を覗いたミンミが、息を飲んだ。

「……！」

ウォルフが振り返ると、ミンミは額に脂汗を浮かべて険しい顔をしていた。

「……大丈夫か？」

リチュとアルバインに気付かれないように小声で訊ねると、ミンミは一度ごくぐりと音を立てて唾を飲み込んで、頷いた。

「……大丈夫……」

ウォルフには、ミンミが驚いた理由が手に取るように解る。

ウォルフは彼女が、エル・アムルと、この模様を刻印とする神シンボルから逃げている事を知っている。そのために、ともにいる事も決して忘れない。

「戻ろう。ドルトムントに、状況を報告する。」

ウォルフが言うと、リチュとアルバインが頷いた。

鉾山を出ると、既に陽は少し西へ傾き始めていた。

屋敷へ戻り、ドルトムントに報告をする。

手記にあつた封術が解けていた事、強力な『顔のない者』がいた事、遺跡には近付いても害はないが、あまり手荒な真似はしない方が良さそうである事…。

扉の刻印は、見た事がないので何の事だか解らないとだけ伝え、それ以上の事は告げなかった。

口外可能な事が限られるため、ウオルフだけでドルトムントの書斎を訪れた。

「ただのケモノではなく、『顔のない者』がいるのか。」

報告を受け、ドルトムントが腕組をした。予想に反して、気弱な反応だとウオルフは思った。が、世情を考えると、無理もない。

「どうされますか？」

ウオルフが尋ねると、「どうするもこうするも…。」とドルトムントが口をへの字に曲げた。

「そのままにする外なからう。」

それを聞いて、ウオルフがそつと胸を撫で下ろす。

「それがいいかと思いません。中にいた『顔のない者』は、私たちも少し緊張するレベルのものでしたし。」

「うむ。ちよつとした儲けが出来るかと思つたが、致し方ないな。

ところで…。」

ドルトムントはさつさと納得をし、すぐに邪悪に口の端を上げた。

「ウオルフよ。

メルガニスタがマルレインに宣戦布告したのは、もう耳に入っているか？」

「…えっ!？」

ウオルフがソファセットのテーブルに手を突いて、ソファから腰を浮かせた。

メルガニスタはルーンのすぐ近くの、ミルグ王国との国境付近に

ある。リチュが言っていた村やゴルタダにも近く、そしてウォルフの故郷にも近かった。

アムル教の大聖堂がある事もあり、グランド・カスタやパルバ・ア・ダルからの観光客も多い。

兼ねてよりマルレインからの独立を所望していたメルガニスタと王国との関係は年々緊張度を増しており、一時はいつ宣戦布告が行われてもおかしくないと囁かれるまでに悪化した事もあったが、最近は地区を治める最高指導者がマルレインとの協和を掲げ、その関係も復旧しつつあった。

その状況にあつて、宣戦布告とは…？

表情から内心を悟ったドルトムントが、ウォルフににやりと笑った。

「メルガニスタの謳うマルレインとの協和政策の裏には、猫が猫なで声を上げていたと言うぞ？」

ミンミの存在を知つての発言に、ウォルフがドルトムントを睨み付けた。

「私を睨んでも仕方あるまいよ。」

鬱憤ここに晴らせり、という事だ。」

「鬱憤…？」

「ほう。やはり知らぬか。」

元々、メルガニスタはミルグの土地だ。あそこにある泉の底には、ミルグの猫どもが血眼になって捜しているエル・終わりの女神ジェルシーの宮殿があるという伝説もある。

さらには、ガルルダで取れる鉱物資源の鉱脈の殆どがマルレインにあるが、メルガニスタはその四分の一を締める。

建国以来、長きに渡り自然主義などと声高に謳い上げられていたミルグ王国も、腹の裏では産業の遅れを懸念し続けていたのだ。

既に戦争屋が傭兵をミルグ西部へ集めているという情報もあるぞ？

だが、もっと面白い情報もある。」

愕然とした表情で我が顔を見るウォルフを面白そうに見つめ、ド

ルトムントが顔の前で手を組み、デスクに凭れた。

「メルガニスタは自分たちが『顔のない者』を生み出したと主張している。しかもマルレーン政府からの要請で、というおまけ付きだ。この技術を兵器として発展、応用すれば、世界征服も強ち夢物語ではなくなるな。」

立ち上がったままルトムントの話の聞いていたウォルフは、今度は軽い眩暈を覚えて座り込んだ。

## 戦火の火種 4

報酬を受け取り、ドルトムントの屋敷を出た一行は、シャトール・カスタの中でも比較的傭兵に友好的な地区を目指して歩いていた。

休息を摂らねばならなかったし、装備の買出しも必要だ。

さらに傭兵は、各国で活動をするにあたり、その国々の専用機関に所在地を登録せねばならなかった。これにより、需要と供給が潤滑に行える。傭兵にとっては、職業斡旋所のような場所だ。

ドルトムントから聞いた話は、まだ三人には告げていなかった。

街を歩いていても、そのような噂話は聞こえなかったので、半分は信憑性を疑ってもいた。

目的の地区は、ドルトムントの屋敷のある地区と真反対にあった。中心街とは異なり、すれ違うヒトビトも傭兵が多く、気兼ねなく泊まれる宿や、酒屋が軒を連ねている。通りも賑やかで、中心街の雰囲気とは対照的だ。

「久しぶりに酒が飲めるう！」

ミンミが伸びをした。

報酬は均等に山分けをする事に決めている。誰が何をしたかではなく、誰もが全員生き延びられるよう動く事が、パーティへの参加条件であったから、誰も文句は言わないし、文句を言う点もない。

「報酬全部使っちゃまわらないように気をつけっぺ。」

アルバインが注意すると、ミンミが「ああ？」と突っかった。

「前にもあったっぺ。宿賃も飲み干しちゃった事があ。」

「あれはついでだよ、つい！」

「ついで全財産使っただか！」

「うるっさいぞお！」

抑<sup>からか</sup>うつアルバインの首に、ミンミが腕を巻き付けてじゃれた。

その様子を、リチュとウォルフが苦笑する。

いつも通りだ。



そこへ、突然声をかけられた。

「ウオルフ…？」

女性の声だ。

一行が一斉に声の主を見ると、そこには青銅の鎧を身に付けたヒュントの女騎士が立って、ウオルフを見つめていた。

「…アルミラ…！」

女性の顔を確認して、ウオルフが名を叫んだ。

アルミラと呼ばれた女性はウオルフに駆け寄り手を取って言った。

「やっぱり、ウオルフなのね！」

生きてたのね！ よかった…。」

アルミラの顔がくしゃりとなった。

「アルミラこそ…。」

ウオルフもアルミラの手を握り締め、切なく微笑んだ。

脇では何事かと三人が覗き込んでいたが、その中でもミンミは不機嫌そうな顔をしている。

「知り合い？」

たまらずミンミが声をかけると、ウオルフが振り返って嬉しそうに笑った。

「ああ。昔のパーティー仲間だ。」

すると、リチュが「あっ！」と言って手を叩いた。

「アルミラ・シエル…？」

「ええ。」

アルミラはリチュに頷いた。

「知ってるの？」

ミンミがりチュにも不機嫌に訊ねると、リチュはにこりと笑って言った。

「直接会うのは初めてだよ。」

でもボクみたいに魔道士から騎士になった傭兵の間では、結構有名な人なんだ。」

「あ、思い出したっぺ。」

リチュの話聞いて、アルバインも手を叩いた。

「閻魔性の魔術しか使えないヒトだっぺ……。」

アルバインが言うと、アルミラが照れて俯いた。

「仕事で、ここへ？」

いい加減握っていた手を離して、ウォルフが問うた。

「ううん。南へ……、ミルグへ向かうためによ。」

ああ、でもウォルフに会えるなんて思わなかった。時間はある？

私たちは明日出航なの。それまで時間があれば……。」

「俺たちもミルグへ向かうつもりなんだ。船は今日はもうないのか？」

「そうみたい。天候が良くないんですって。」

時間があるなら、みんなで食事しない？

「ガインズもいるのよ。」

「本当に!？」

「ええ。」

結局、あのあと残ったのは私とガインズだけだったから、それ以来ずっと一緒なの。

ガインズもあなたを心配してたのよ。

お願い、会ってあげて。」

再びウォルフの手を取って、アルミラが言った。

ウォルフが三人を振り返ると、ミンミ以外は快く頷いた。ミンミは不貞腐れて、そっぽを向いている。が、酒があれば来るだろう。

「ああ、喜んで。」

ウォルフが返事をする、アルミラはぱつと笑って、

「じゃあ、『クック・クルト』って酒場に向かって。この道を通って直ぐ行けば、すぐあるから。」

私は、ガインズを呼んで向かうわ。」

と言うと、走って行ってしまった。

「行くう。」

そう言って歩いていくと、アルミラの言うとおり、すぐに『クック

ク・クルト』という店の看板が見えた。

大きな酒場で、傭兵の出入りは特に多い様子だった。

中へ入ると、外を越える賑やかさと熱気に溢れていた。

空席はないと思われたが、ちょうど入れ違いに出て行く団体があり、そこへ通された。

すぐ来るといふ事だったので、席に着いてメニューだけ眺める事にしたが、価格も手頃だし、隣の席に運ばれてきた料理を見る限り、ポリユームもあって好い感じだった。

「いいお店だね。」

リチュが少し苦勞をして席に座り、言った。

「ああ。」

そこへ、アルミラが現れた。

「お待たせ！」

声をかけるアルミラの後ろには、大鎌を背負ったガタイの大きなミーヤ種の男が立っていた。男はウォルフを見るなりアルミラを避け、ウォルフに抱きつき叫んだ。

「ウォルフううう！！！」

周りの客が、何事かとこちらを窺った。

抱きつかれたウォルフはウォルフで、痛さと暑苦しさと苦笑している。

「ガインズ。会いたかったよ。」

「心配したんだぞ、ウォルフ。噂でしか無事を確認出来なかったからな！」

「うんうん。済まなかった。」

「まっただぞ、ウォルフ。アルミラと二人、どれだけ心配した事か！」

大きな声で嬉し泣きをして喚くガインズのせいで、店がざわめきだした。

「ウォルフって、あのウォルフ GANG か…？」

「”ウォルフの傭兵”か…！？」

「アルミラ・シエルがいるぞ…。」

「あのちっこいの、リチュリー・リチュじゃないのか？」

ついにはリチュの名まで囁かれ、リチュが椅子の上に立ってガイ  
ンズの肩を叩いた。そうでないかと、届かない。

「ガインズ、さん？ とりあえず、座ろうよ。」

リチュに言われて、やっと状況に気付いたガインズが、「すま  
ん。」と店中の人間に詫びて席に着いた。

だが、アルミラも席に着き、ウォルフのテーブルだけが落ち着い  
て、他の客の興奮は治まらなかった。

「すみません…。」

アルバインが立ち上がって、その場で回りながら方々へ頭を下げ  
て漸く、店内が元の雰囲気に戻った。が、それでも他の席はウォル  
フの席の話題が続いている。

だが、お構いなしにウォルフはまず、リチュとアルバイン、ミン  
ミの紹介をし、その三人に向かって、ガインズとアルミラについて  
話し始めた。

「彼らは、俺が傭兵になったばかりの時にパーティを組んでた。

三年くらい一緒だったかな。」

「もう十年近く前になるなあ。」

「そうね…。私はその頃まだ魔道士で、ウォルフが戦士、ガイ  
ンズは騎士で。他にも仲間がいたんだけど、みんな解散と同時に散  
りになってしまったの。」

「何で、解散しただけ？」

アルバインが訊ねると、アルミラが悲しそうに笑った。

「失敗しちゃってね、ウォルフが大怪我を負って、仲間の何人も  
死んでしまった…。」

「仕事は何とかこなしたんだけどね。」

そう聞いて、アルバインが罰の悪い顔をして肩を竦めた。

「いいの。気にしないで。どこかで噂になってる事だし、その当  
時はそれこそ、世界中の傭兵がその事を知っていたから。」

「あれから暫く、オレらあ、大つぴらに動けなくてな。小さな仕事を細々請けたり、名前を偽って活動したり…。そんな事をしているうちに、ウォルフが解散を決定したんだ。

怪我也中々治らなかつたし、一番辛かつたのあ、ウォルフだったな…。」

ガインズが言うと、ウォルフが首を振った。

「そうだったか。」

アルバインが言った。リチュはその頃傭兵を目指しており、噂は聞いて知っていたが、ミンミは知らなかつた。

その事が、ミンミの不機嫌に拍車をかける。

「ねえ、なんか頼んでいい?」

「ああ、ごめんなさい。そうね。」

慌ててアルミラが店員を呼ぶ。

「ここはオレらが持つから、気にしないで食ってくれ。」

ガインズが言うと、

「悪いよ。ワリカンでいいから。」

とウォルフが困った。

「いいんだよ。そうさせてくれ。」

実は、ちよいと相談もあるんだ。」

ガインズがそう言ったところで、店員がやって来た。

「何になさいます?」

気の良さそうなミーヤ種の少女だったので、ミンミの気分が多少和らいだ。

「酒、何入ってる?」

「今日は、ミルグから入って来たビールが何種類かありますよ!

あとは普通の発泡酒と、自家製のぶどう酒です。」

「じゃあ、ミルグのビール。」

みんなは?」

「あ、悪い、オレもミルグのビール。カリル産のがあったら、そいつがいいな!」

「私はぶどう酒を。」

「オラあ、フルーツジュースがいいべ。」

「あ、ボクも。」

「んだよ、酒飲めよ！」

「二日酔いするっぺ。」

「ボク未成年だし…。」

リチュユが言うと、一同が一斉に「えっ!？」と言ってリチュユを見た。

リチュユは恥ずかしそうに、もじもじする。

「ボク、まだ十五なんだけど…。」

「…。」

照れるリチュユを、一同が呆然と見下ろした。

ヴェル・ヴィーラでは、国際法に基き、生まれて二十年未満の者は未成年とされる。この頃の若者は飲酒喫煙を禁じられており、酒や煙草を与えた店には厳しい処罰が下される。

大抵は傭兵になると見た目も大人びるので皆内密に飲酒するが、中にはこうして正直にカミングアウトする者もいる。

が、一同が驚いているのは、そう言った理由ではなく…。

「お前、十歳で傭兵になったのかよ…。」

ミンミの言うとおり、リチュユは五年前に傭兵になったのだった。今が十五なら、傭兵になったのは十の時と言う事になってしまう。

リチュユもそこそそ有名な傭兵である。年齢こそ知らぬども、いつ傭兵になったかを知らない者は少ない。

「そう…だね…。あの頃は、まだ傭兵だって自覚はなかったんだけど…。」

話を聞けば聞くほど、皆の眉が歪む。

「あの…。」

店員が、おずおずと切り出した。

「ご注文は、以上ですか…?」

「ああ。俺、俺もぶどう酒で。」

まだだったウォルフのオーダーを聞き、店員はいそいそと厨房へと引き上げて行った。

店員が去った後、何故か席に重い沈黙が流れた。リチュも困っていて、思わずウォルフを見る。

ウォルフは、鼻で溜め息を吐いて、ガインズに問いかけた。

「相談って？」

「ああ、そうそう。相談があるんだよ。」

何故か助かった、という顔をして、ガインズが話し始めた。

「メルガニスタの噂は、もう耳に入ってるか？」

ガインズと行動をとみにしていたアルミラ以外は、ウォルフが「！」となり、他は「…？」という反応をした。その様子に、ガインズはなるほどと頷いて、「そっからだな。」と少し横道に反れる。

「昨日の夜だ。」

メルガニスタからマルレインに宣戦布告がなされた、という噂が流れた。「

「噂…？」

ウォルフが聞き返した。ドルトムントの話と、少し違う。

「ああ。今の時点では、まだ誰も、誰が、いつ、どう言った内容の布告を、どういう経緯で行ったか知らないんだ。」

噂の出所もわからない。「

「じゃあ、宣戦布告されたというのは嘘なのか？」

「嘘かどうかもわからない。」

ただ…。」

「ただ？」

とミンミ。

「ただな。」

噂にしちゃ、内容が具体的過ぎるんだ。

要件は三つ。

まずメルガニスタが保有するマルレイン領内の鉱脈の権利を主張している。「

次に、マルレインと共同で進めているある研究について、その権利の総てを主張している。」

『顔のない者』を生み出したという、あの事が…。

「そして最後に、この二つの条件を飲めない場合、メルガニスタはミルグに所属し、マルレインとそれに同調した全ての国家へ全面戦争をしかける。」

ガタリと音を立てて立ち上がったミンミヤ、目をまん丸にして聞いているアルバインとリチュの傍らで、ウオルフの脳裏に、ドルトムントの言葉が過ぎった。

猫が猫なで声を上げているらしいぞ。

「……。」

「そこでオレの元へ、マルレインの内閣調査室から、噂の出所を探れと言う依頼が来た。」

恐らく、他のパーティーの幾つかにも行っているだろうし、ウオルフもその依頼は出ている筈だが、仮に来てなくても構わない。暫く、行動を共にしないか。」

ウオルフがガインズの顔を見た。

「本当は、アルフォオーネのパーティーに声をかけるつもりだったんだが、アルフォオーネのパーティーは今分裂を起こしてて、使い物にならないらしいんでな、困っていたところだったんだ…。」

アルフォオーネはウオルフと同様、作戦遂行能力の高さを評価されている傭兵の一人で、若い女エルフィだ。

アルフォオーネのパーティーの分裂騒動はウオルフたちの耳にも入っていた。メンバーの一人が作戦実行中に他パーティーのメンバーを負傷させた事件が発端で、件のメンバーをアルフォオーネが除名にした事で話が拗れたらしかった。

「ミルグへ行くと言っていたな？」

ウオルフが尋ねると、ガインズが深く頷いた。

「ミルグの名が出て来た以上は、ミルグの調査もしなきゃならん。」

ミルグ経由でメルガニスタへ行き、最終的にマルレインへ向かう。」



「グランド・カスタやパルバ・ア・ダルが関与している可能性は？」  
「その可能性は棄ててない。だからこそ、まず名の挙がった場所へ行く。こちらが噂の出所なら、暫くはこちらで大きな動きはないと踏んでる。」

「……………」

ウォルフが唇を噛んだ。

確かに、ミルグに用もあるし、”水竜”の事を調べるためにはメルガニスタの近くへも行かねばならない。

行動範囲は重なるが、不用意に関与して万が一の事があれば、メンバーを傷付け兼ねない。

ウォルフがりチュ、アルバイン、ミンミと順に顔を見て行くと、皆それぞれ一つずつ頷いて見せた。

「…解った。」

その代わり、と言っては何だが、道中色々寄って欲しい場所がある。

可能な限り、で構わない。」

ウォルフが言うと、ガインズとアルミラが微笑んだ。

「いいわ。無理を言っているのは承知しているもの。可能な限り、私たちも協力する。」

話は、決まった。

その後の食事はそこそこ楽しいもので、旅の最中に立ち寄った村や街の情報交換などで場は盛り上がり、随分と夜深くまで酒場に長居してしまった。

ふと気が付くとりチュが疲れて寝入っており、それを期に解散となった。

ウォルフたちは宿を決めていなかったなので、ガインズとアルミラが泊まる宿を使う事にした。

結局、酒場での飲食代はガインズが全額負担してくれ、変わりに宿賃の半分をウォルフたちが負担する事で話がまとまった。

宿までの道中、場の雰囲気は飲まれ酔っ払いのようにヨロヨロよるめくアルバインと、本当に泥酔しているミンミが肩を組んで歩く後方で、子供のように眠る…。否、実際子供であるリチュを背ぶつたウォルフがガインズと並んで歩く。アルミラはその真ん中で、前方のアルバインとミンミをにこにこしながら見つめている。

宿までの道すがら、酔い潰れたり、酔った勢いで殴りあう傭兵どもを見かけた。

傭兵は酒が好きだ。虐げられたり、蔑まれたり、ケモノとは言え、生き物を狩り続ける事による心的ストレスが多い所為だと思われる。その溜まった鬱憤を、酒で忘れるのだ。

そんな光景に、溜め息を吐きつつも、哀愁を感じ同情してしまう。酔っ払い傭兵たちを呆つと眺めていたウォルフの背中、少しリチュがずれた。ウォルフが背負い直すと、ガインズが静かに問いかけた。

「ミルグに行つて、大丈夫なのか…?」

その言葉に、ウォルフの表情が若干引き締まる。

「誘つておいてなんだが、ミルグだけじゃない。マルレインに行く事だつて、リスクがあるんじゃないのか?」

「…。」

「ウォルフ…?」

「…。」

「…。」

訊ねるが、ウォルフが何も言わないので、ガインズもそれ以上何も言わなかった。

## 戦火の火種 5

宿は酒場から十分ほど歩いた場所にあり、港にも近かった。潮風の香る通りは、酒場付近の賑わいと正反対にひっそりとしていた。

宿に入ると、ガインズがウォルフたちの部屋を取ってくれ、酔っ払いのアルバインとミンミをアルミラが、すっかり眠り込んでいるリチュを背負ったウォルフをガインズが部屋まで案内してくれた。部屋に入り、ガス灯を点けてリチュをそっとベッドに下ろすと、リチュはごろりと寝返りを打って、完全に寝入ってしまった。ウォルフはリチュにシーツをかけ、ガインズに振り返った。

「ガインズ。」

「少し、話は出来るか？」

夜も深けている。酒も入っているし、眠いだろうと思ったが、どうしても話しておきたい事があった。

「ああ。何でも話してくれ。」

ガインズは昔のままだった。ウォルフの声や目つきから、総てを感じ取ってくれる。

ウォルフは一つ頷くと、部屋の奥にあるソファに目をやった。

二人でソファに座ると、暫く無言になった。ガインズはウォルフが話し始めるのを待った。

やがて、何度か深呼吸をしたウォルフが、ゆっくりと話し始めた。

「ミルグには、ミンミの妹の墓参りをしに行く。」

墓があるのは、タリヲワ砂漠の南の集落。だが、ミンミはそのこの住人に見付かると拙い。」

「お前もだろっ？」

ガインズが言った。

「…聞いているか…。」

「殆ど噂にならなかつたがな。ごく僅かだが、知っている傭兵もい

る。」

「そうか…。」

「詳しくは聞かんが、墓参りは絶対に必要なのか？」

「ああ。」

ガインズに、ウォルフが頷いた。ガス灯だけが灯る室内は暗く、しかしウォルフの目はきらりと光っている。

「…わかった。」

「次に、ゴルタダの近くにある農村へ行く。」

「そこで、『雨乞いの唄』について調べる事がある。」

「『雨乞いの唄』を？」

「ああ。」

そこで、ウォルフはドルトムント邸と裏山での一件、リチュが聞いた『雨乞いの唄』の話ガインズに語った。ただし、マルレインによる『顔のない者』の研究については、伏せた。

聞き終えたガインズは眉間に皺を寄せ、背を丸めて頬杖を突いた。

「“水竜”がいたというのか…。」

「俺たちは直接見た訳ではないから、そうは言い切れないが…。」

「『雨乞いの唄』の事なら、メルガニスタでも得られる情報はありそうだぞ？」

「…どういう事だ？」

「『雨乞いの唄』は、古来から原種エルフィに伝わるエル・アムルの唄だと言われているが、あの唄は元はエ…。」

「エル・ジェルシーを讃える唄だからだよ。」

ガインズの声を、透き通る声が遮った。

ぎよつとして振り返ると、リチュがベッドの上に立ち上がって、こちらを見ていた。

「…リチュ。」

リチュはよいしょとベッドから飛び降りると、二人に歩み寄り、空いている席に座った。

「ごめん、ウォルフ。聞かれなかったから、思い出せなかった。」

「ガインスさんの話を聞いてて、思い出したよ。」

「ガインスでいいぞ、リチュ。」

三十をとうに過ぎたガインスが、リチュの頭を捏ねた。「ありがとう、ガインス。」とリチュは笑って、すぐに笑顔をしまいこむ。

「エル・ジェルシーの唄…？」

ウォルフが聞き返すと、リチュとガインスが揃って頷いた。

「メルガニスタでは、この唄は元々エル・ジェルシーの唄なんだ。」

カストダル大陸の湯きを潤したのは、エル・ジェルシーなんだよ。」

「じゃあ…、何で…？」

戸惑うウォルフに、リチュは首を振った。

「解らない。」

「アムル教が出来た頃には既に、『雨乞いの唄』はエル・アムルを讃える唄として浸透していた。」

この件に、アムル教は関わっていないという事くらいしか、わからん。」

ガインスが、唸った。

「そもそも、不思議だと思うんだ。」

「？」

「どうしてエルファイが、カストダル大陸の伝説を唄ってるのか。」

ウォルフが、微かにはつと息を飲んだ。

「原種エルファイも、その後生まれた亜種のリトル・エルも、発祥はガルルダ大陸と言われているのに、カストダル大陸を満たした唄が、初めエルファイだけに伝えられてた。エルファイに伝わったのではなく、エルファイが異種族に伝えてたんだ。」

「…そうか…。」

ガインスが納得をした。

ウォルフも何となく理解しかけていた。

ヴェル・ヴィーラ誕生は約四七億年前と言われ、ヒトが生まれた頃までの約四六億年間は、竜がこの世界を統率していたと言われている。竜に関しては伝説としても、その後エル・アムルを始めとす

る創世神によるヒトの創世は今から五〇〇〇年前後前だという説が定説になっている。その後、文明と文化をヒトが築くまで少なくとも一〇〇〇年はかかったとされていおり、文明が誕生した後もカストダル大陸とガルルダ大陸との間に異種族交流はなく、各種族とも発祥の大陸にのみ暮らしてきた。即ちカストダル大陸にはヒュントしか住んでいなかったのである。

移住が行われたのは近代と呼ばれるここ二〇〇〇年の事であるが、『雨乞いの唄』については最古の記録が三五〇〇年ほど前に記された書物から発見されており、その書物は原種エルフィの古代遺跡より今から二三八〇年前に発掘されたものだった。

その『雨乞いの唄』がヒュントの歴史上に記されたのは、書物発掘から一五〇年後の事であり、アムル教もその一〇〇年後の発足となっている。が、このエルフィの遺跡で発掘された書物で、既に『雨乞いの唄』はエル・アムルの偉業を讃える唄とされていた。

尤も、書物上ではこれは唄として扱われてはいなかったが。

古い書物や遺跡を調べても、移住の始まった二〇〇〇年前後より前の如何なる記録にも、他の大陸の事は記されていない。つまり、どの種族も、ほかに大陸があるとか、他の種族がいるとまでは知らなかった可能性が高い。仮に知っていたとしても、カストダル大陸の唄をエルフィが、しかもアムルの唄として歌い継いでいた事には、違和感を感じる。

しかしその一方で、メルガニスタの一部では、古来ヒトは他大陸の存在を知り、『雨乞いの唄』をエル・ジェルシーの唄として唄い継いだ事実がある。

「仮に、メルガニスタに伝わる話が事実なら、書物に記録される前に、誰かがある意図を以ってエル・ジェルシーの偉業をエル・アムルのものとして摩り替えた…？」

ガインズが呟くと、リチュが続けた。

「エル・ジェルシーについては、みんな名前くらいしか知らない。他のヒトビトもそうだ。学校の創世記の授業でも、エル・ジェルシ

「は”終わりの女神”や暗黒を生み出した天使だと呼ばれていただけで、何者かまでは語られない。

この世界ではただの、エル・アムルに倒された”終末の女神”ではないんだ。

エル・ジェルシーは、エル・アムルと誕生の瞬間をともにした女神なのに……。」

むかしむかし、ずっとむかし……。

世界は穢れを知らず、光輝く意思で溢れていました。

その意思是時折風に流され水に流されてぶつかっては合わさり、ついに神になりました。

しかし、神は自分で立ち上がる事が出来ず、倒れて壊れてしまったのです。

散らばった六つの破片から、純白の羽を持った六人の天使が生まれました。

一人目の天使が言いました。”純白の羽で命ヒトを作ろう”と。

天使は世界のあちこちへと飛んで行き、”命”を作り始めました。でも、六人目の天使は”命”を作りませんでした。

ある日、三人目の天使がどうしてと問いました。

すると六人目の天使は言いました。

ボクの羽が汚れているからだよ。

六人目の天使の羽は汚れていました。

神が倒れて破片になった時、一つだけ泥に浸かってしまったからでした。

汚れは消えませんでした。

だから”命”を作りませんでした。

”汚れた命”は作ってはいけない。そう思ったからです。

そこへ四人目の天使が来て言いました。

”・・・・・・?”

その言葉に、六人目の天使は泣きました。

「エル・ジェルシーは、汚れた羽の六人目の天使だと言われている。エル・アムルは四人目とも一人目とも言われているけど、『雨乞いの唄』が記された書物では、エル・アムルは一人目の天使だと書かれていた。

だから、エル・アムルは”誕生の女神”として讃えられている。そして、多くのヒトは知らない事だけど、一部の地域では、『雨乞いの唄』はエル・ジェルシーがこの時流した涙の行から派生したものと考えられている。

お伽嚙自体は、『雨乞いの唄』が記された書物が作られる、さらに二〇〇年程前に書かれたとされる書物に記述があったとされている。」

リチュの説明に、ウォルフが数度頷いた。

「閻属性はエル・ジェルシーから溢れたと言われ、ミルグのとある集落は、そのエル・ジェルシーを奉る宮殿を捜している。

宮殿があるのは、メルガニスタと言う説があるし、メルガニスタには、密教に近いがエル・ジェルシーを信仰する宗教も存在するらしい。」



ガインズの説明にも、ウォルフは何度か頷いた。

「それで、メルガニスタで『雨乞いの唄』か。」

「そういう事。」

であれば、メルガニスタでの調査も必要だ。

「解った。マルレインの調査の折、少しだけメルガニスタでも時間をくれ。」

そう言うウォルフに、ガインズが尋ねた。

「一つ聞くが。」

『雨乞いの唄』の調査は、興味本位か？」

「そんな訳ない。」

ウォルフはそれだけ言っつて、黙り込んだ。

『雨乞いの唄』を調べれば、ミンミの役割は終わるかも知れない。楽にさせてやれるかも知れない。

だが、ここでそんな話が出る筈もなかった。

「んもお、飲めねえだ…。」

酒など入っていないのにむにやむにやと寝言を言うアルバインをベッドに寝かせ、アルミラはミンミを連れて取っていた自分の部屋へ入った。たまたまツインルームしか開いていなかったのだが、ウォルフの一行が加わった今となつては、ツインでラッキーだったと思つていた。

半分寝かかっているミンミをベッドへ座らせ、アルミラはミンミの装備品を外した。次いで自分の装備も外し、ベッド脇の椅子の上に置いた。

ミンミに背を向けると、ミンミが話しかけて来た。

「ねえ…。」

「ん？」

振り向くと、ミンミはさっきまで酔っていたと思えないほどには

つきりとした顔で、アルミラを見ていた。

「あんたたち、ミルグを疑ってんの？」

ミンミの問いに、アルミラの目つきが少しだけ鋭くなった。

「疑っていたら、どうするの？」

「どうもしないけど。」

「故郷を疑われているのに？」

「うん。」

アルミラが首を小さく傾げてみせると、

「棄てて来たからね。」

と、ミンミはその態度が気に入らないとでも言つように吐き棄てた。

「じゃあ、何故聞くの？」

棄てた故郷の事なんて、どうでもいいじゃない？」

アルミラの言葉に、ミンミが拳を握りしめた。少し伸びかかっていた爪が肉に食い込み、ぴりぴりと痛む。

「嘘。ごめんなさい。」

アルミラが、溜め息交じりに言った。

「そんなに敵意を剥き出しにしないで欲しいの。」

私もガインズも、ウォルフを奪おうなんて思っていないから。

生きていてくれた、それだけで私もガインズも満足なの。本当な

のよ。」

「もう終わってしまった事なんだから。」と言って、アルミラが苦笑した。

アルバインもリチュも態度には表わさないが、皆がそれを心配していたに違いない。

ミンミは顕著に態度に示すので、判り易いだけだった。

「ウォルフを見れば判るわ。」

あの人は、あなたを救う事しか考えてない。

あなたを定めから切り離す事しか、考えてない。

きつと、<sup>ヴェル・ヴェーラ</sup>世界の事だって、どうでもいいと思ってるわ。」

アルミラの言い回しに、ミンミが少し身を引いた。

「…知ってるの？」

「知ってるわ。」

それでもウォルフのパーティでそこそこやっていた傭兵の端くれですもの。」

「…。」

「でも、私だけ知っているのは不公平よね。だから教えてあげるわ。これで相子にしましょう。」

そう言っつて、アルミラはミンミと正面で向かい合つと、浮かべていた頬笑みを消し去った。

「私は、あなたと同じ立場にいた者。」

そして、かつては私も、ウォルフの手によってその定めから解放された者。」

ただあなたと私が違うのは、生まれた場所の信仰だけ。

ただそれだけで、私は解放され、あなたは追われる事になった。

そうね？”ミィヤ・アムリス”。」

それは、ミンミが棄てた、本当の名だ。

## 戦火の火種 6

宿から港までは歩いて十五分ほどの距離があった。

宿辺りからはなだらかな下り坂が続き、曲がり角に差し掛かると港が一望出来た。日の出を迎えて間もなく。空は快晴で雲一つなく、乗船予定のガレオン船は順調に出る様子で港に停泊している。

港は市場で賑わっていて、面々は各々所用を済ませに個別行動をする事になった。乗船の合図の鐘が鳴ったら、棧橋に集合だ。

ミンミとアルバイン、それにガインズは武器が見たいと言い、ミルグからやって来た武器商人の店へと向かった。

リチュはミルグまでの船上で摘まめる食べ物を探すと言い、食料品を見に行った。

残ったウォルフとアルミラは、防具と消耗品を見る事で意見が一致し、まずは装備全般を扱う店へ向かう事にした。

早朝だと言うのに傭兵と商人で港は混み合い、マーケットの大きさを感ずる。

装備屋に着き、店内を見て回る。外とは一転して、店内は不思議とひっそりとしていた。客は二人の他におらず、店に入っても店員すら出て来なかった。

誰かいないかと奥に置かれたカウンターに近付くと、上に置かれた青い硝子細工が粉々に壊れていた。まさか、誰もいない店では…。そう不安になるほど、不気味な雰囲気だった。

一応、めぼしいものはないかと店内を回る。

「ねえ、ウォルフ。」

壁に掛けられた頭防具を眺めながら、アルミラが呼んだ。

「昨日、ミンミと少し話をしたの。」

私があなたに助けてもらった時の事。」

「……………」

ウォルフは手に取っていたブーツから目を反らす事もなく、黙っ

ていた。

「信仰が違っただけで、こんなに人生が変わる物なのかしら…。私も彼女も、あなたから名前を貰って、生き永らえて。

なのに、私はもう逃げなくていいのに、彼女はずっと逃げなければならなくて…。」

「ねえ、ウォルフ…。」

「おや、お客さんかい？」

「！」

びっくりして二人揃って声の方を見ると、カウンター脇でヒュントの初老の男がこちらを見て笑っていた。

「いらっしやい。」

何かお探しかね？」

「どうやら、店主のようだ。」

「ああ、すみません。」

少し見させて貰っています。」

ウォルフが言うと、店主は「ゆっくり見て行きなさい。」と言ったあと、ウォルフをじっと見て続けた。

「お前さん、ドルトムントの裏山に入ったね？」

「！？」

ウォルフが目を丸くして、表情の変わらない店主を凝視した。

「なるほど、あの『顔のない者』を倒したのは、お前さんだったか…。」

店主はそう言うと、注視していなければ解らないほど微かに、哀しそうな顔をした。

「何か、ご存じなんですか？」

ウォルフが訊ねる。

「いやいや。あそこは『顔のない者』が棲みついてるって一時期噂になってね。」

私はこれでも数多くの傭兵と出会い、彼らを見定めて来た。

彼らが何と出会い、何を倒したか、大体判るんだよ。」

疑った訳ではないが、訝しげに店主を見つめるウォルフに、店主は笑って、

「嘘だと思ふなら、またここへ寄りなさい。次も、当ててあげよう。そつだ。一つだけ、店にある好きなものを持って行きなさい。

変な話をしてみました、お詫びだ。」

と言うと、少し脚を引き摺りながら、店の奥へと引つ込んでしまった。

残された二人は顔を見合つて、躊躇いがちに店内を物色した。

店主のいなくなった店で、お言葉に甘えて比較的消耗品である皮手袋を貰い、その後別の店でも所用を済ませたところで、乗船の合図の鐘の音が聞こえた。

棧橋に行くに既にみながあり、ウォルフとアルミラを待っていた。ウォルフが先頭に立って人数分の乗船賃を払い、船に乗る。

甲板に出ると、結構な人数の傭兵がいて、様々に座り込んだりパ―ティで地図を眺めたりしていた。

ウォルフたちは、比較的眺めの良い船首付近で過ごす事にし、荷物置いた。

「ミルグまでは、四時間つとてこか。」

風向きを見て、ガインズが言った。風はミルグの方向へ、少し強めに吹いている。

「昼頃に着ければ、良さそつだな。」

ウォルフがそう言うと、出航の鐘がカンカンと激しく鳴った。

船は赤石炭という鉱物を熱する事で発生するエネルギーで動くガレオン船に似せた飛空艇で、約十年ほど前にパルバ・ア・ダルの造船会社が発明した。それまでは、エネルギーこそ同じではあるものの海上に行く船が主な移動手段であった。海が時化れば船は出ないし、少しでも舵取りを誤れば座礁して最悪死人も出る。それに比べ

ると、強風や嵐さえ来なければ比較的どのような天候でも飛び立て、多少舵取りを誤ってもすぐさま落ちるような事もなく、その上移動速度が速いこの飛空艇は、瞬く間に世界中に普及した。だが、特殊な開発技術が必要とする事と、赤石炭の六割がパルバ・ア・ダルから採掘されると言うような事情が重なり、大洋を跨ぐ様な遠方への運航については、当の造船会社が独占的に行っている。

飛空艇であるから、場所さえあればどこでも発着場にはなるが、船底の痛みや、設計上の都合で今でも海の港を使っている。だが、それは飛空艇会社の都合で、主要の利用客である傭兵にとっては、海の港からの出航こそ冒険の基本のような、気分的な部分でそれが受け入れられていた。

出航の合図からすぐに、船の脇に立ついくつものプロペラが回り始めた。

ぐん、と進行方向へ少し重力がかかり、船がゆっくり動きだす。やがて、船首がふわりと浮きあがり、船腹にぶつかる水の音が消えた。

徐々に風が強くなり、船の角度が並行になって行く。脇から下を覗くと、陸地は遙か下の方にあり、ぐんぐん遠ざかって行った。

「飛空艇、久しぶりだー！」

ミンミとアルバインは飛空艇に乗るのが好きで、飛行高度へ到達して運航が安定するなり、船尾へと走って行ってしまった。

「ミルグに着いてからの経路を確認しないとな。」

二人の姿が見えなくなるのを待って、ガインズがウォルフに言った。

「ああ。」と、ウォルフが頷き、腰袋に丸めて入れてあった羊皮紙を取り出して広げた。

羊皮紙は何枚か重なっていて、その中からミルグの地図を抜き出す。

「港からタリヲワ砂漠に出るまでは、堂々と動いても心配ないと思う。目立つのはまずいが、普通に行っている分には問題ない。」

ただ、依頼を受ける訳ではないから、斡旋所へは寄らない。これはいいか？」

ウォルフが聞くと、ガインスは当たり前という顔で頷いた。

「問題はタリヲワ砂漠から集落までの道だ。途中、”鍋底”がある。」

”鍋底”とは、タリヲワ砂漠の中心付近を東西に走る岩場のエリアの事だが、この辺りは水脈と地面との間に硬い岩盤があり、オアシスどころか井戸さえ掘れないため水分補給に関して困難を窮める。さらに植物が生えないため地面は常に焼けており、休憩する余地もない。”鍋底”という名はここから来ており、文字通り、空焚きした鍋底に立っているようなものである。

商人や傭兵はこの”鍋底”を、『ランクル』という有蹄動物を砂漠前のトゥーリスという街で借り、それに乗って縦断する。

だが、ランクルはトゥーリスの傭兵斡旋所に登録した傭兵が、商業許可証を発行された商人にしか貸し出されない決まりになっているため、今回はその方法が取れない。斡旋所に登録すれば、いつ集落の住民に見つかってしまうか知れないからだ。

「マルレイン側から周るんじゃ駄目なの？」

アルミスが言った。飛空艇が到着するのはトゥーリスの北に位置するミルグの首都である。そこから真っ直ぐタリヲワ砂漠を行くのと、マルレインを経由するのでは、距離にして六倍、日数を概算しても一週間ほど違う上、目的地でもあるメルガニスタを一度通り過ぎる事になるが、安全を考えるなら、その方が幾らかマシに思えた。

「マルレイン側からだとは距離があり過ぎるのかな……。」

とガインスが険しい顔を見ると、リチュが「ねえ？」と皆の顔を見渡した。

「商業許可証って、確かグループに一枚しか発行されなかったよね？」

タリヲワ砂漠には、比較的厄介なケモノも多いし、護衛を無料で受ける代わりに、商人として同行させて貰えないか、交渉出来ない



かな？」

確かに、街から一步出ればケモノに襲われる危険は高くなり、護衛が必要だ。護衛も結局は傭兵に対して報酬を支払い雇う事になるので、ランクルの賃貸料と合わせると、砂漠を渡るだけで結構な支払いが発生する。金銭的な事を考えるなら、傭兵への報酬が無料になるのは大きい。が、一方で違法行為を犯すリスクが、その金額に見合うか、というと、誰が見てもそうとは言えない。

「交渉に乗るような商人がいればいいがな…。」  
ウォルフが言うと、リチュが珍しく、ふふんと少し自慢げに笑った。

「ボク、昔の傭兵仲間がこの街の『ランクル厩舎』で働いてるの。たまに、ランクルの賃貸料を値切る商人もいるらしいし、話は出来ると思う。」

任せてくれないかな？」

「ふむ…。その方法しかないか…。」  
ウォルフが呟いて、リチュに頷いた。

船尾に到着するなり、アルバインとミンミは飛空艇の縁に座って地上を見下ろしていた。

「やっぱり飛空艇はいいべ…。」

アルバインはそう言って、にやにやと笑った。

「傭兵やってても、用がなければ滅多に乗らねえかな。」

「うん。」

久々の飛空艇に心もウキウキしてはいるものの、アルバインに比べてミンミはどことなく、心此処に在らずという感じだった。

横目に見ると、ミンミは確かに感じたとおりの目が虚ろで、物憂げな表情を浮かべていた。

「…。」

アルバインは肩で小さく溜め息を吐いて、縁から降りて肘を突いた。

「ウォルフのパーティに入る前は、リチュと暫く二人でやってただけど、その前は誰とも組まずに独りでやってただよ。」

突然話し始めたアルバインを、ミンミがちらりと見た。

「オラあ、パルバ・ア・ダルの北端れにある小さな村で生まれ育っただ。」

その辺りは古来の遺跡が立ち並ぶ場所で、土も枯れかけていたりケモノもあんまり生息してない、不毛の地って言われてたっぺ…。」  
農作物がギリギリ何とか育つその土地では、最低限の暮らししか出来なかった。

だが、誰も不満を持たずに暮らしていた。否、不満を言っても仕方がなかったから、誰も言わなかっただけかも知れないが…。」

それでも、必死ながらも穏やかに、暮らしていた。

「でも、ある時、隣村との合併話が持ち上がったなあ。正確には、隣村への集団移住の話だべ。」

村長も村のジジババたちも頭抱えて土地を棄てるか悩んだんだあ。

一つ谷と森を隔てた隣村の土は、オラの村の土より良い土で、作物の育ちもよかつたんだっぺ。

オラの村は子供も少なくなつてたっぺな、いつか必ず、どこかの村に移住しなければならないと、みんな思つてたんだあ…。」

先祖代々受け継いで来た家や畑、そして小さいながらも歴史のある多数の遺跡を棄てる覚悟は出来ていたつもりだったが、いざとなると、心残りは尽きなかった。

村の者の中には当然反対する者もいて、已む無しと考えていた村民との間で話し合いが進まなかった状況もあった。そして、反対派の中には、アルバインもいた。

「そんな時だあ。村に『顔のない者』が現れたのは…。」

その日は何度目か、村長と隣村の長と住人とが合併の話を行っていた日で、補佐として何人かの男たちが出払ってしまっていて、立

ち向かえる者が殆どいなかった。

「…オラも隣村に付き添っててな。」

「報せに駆けつけた隣の家の小さな子供と一緒に村に戻った頃には、村は火に包まれてただ。」

「火は、乾燥した強い北風に煽られ、見る見る勢いを増して、家々を焼いて行つた。」

「その頃すでに魔術について学び、ある程度の術が使えていたアルバインは、火の中に身を投じながらも懸命に魔術を使いながら消火活動をしたものの、火の手は既に村全体に回っており、足の悪い老人たちは、ほとんどが皆逃げ遅れ、赤子を背負った母親たちは大火傷を負い、その赤子たちは吸い込んだ熱風により肺や気管支をやられ、死んで行つた。」

「『顔のない者』はいつの間にか消えていて、どこへ消えたか行方知れずになつた者もいたんだあ。」

「……………」

「結局、その事件が切欠で村は隣村と合併する事になって、オラたちは村を棄てただ。」

「今では移住した村民はみな、そこそこ裕福になつたし、結果としては合併は成功だつただ。」

「けど、だからこそ、もつと早く合併を決めておけば、少なくとも火事で死ぬ者は少なかったんじゃないかねえかと、そう思う者も少なくはないんだな…。」

「かく言う自分も、その一人だ。」

「オラ、後悔しただ。」

「死んでつた者たちは、オラが殺した事になるんじゃないかねえかと思つて…。」

「背負うには余りにも大き過ぎる”罪”だった。居た堪れなくなつたアルバインは、密かに村を出た。」

「そのまま野垂れ死んでしまおうと思つた事もあつたが、自ら命を絶つほどの勇気も絶望も持ち合わせていなかった。」

結局自分を生かさなければならず、傭兵になったのは、生活のためだ。

「呆つと各地を歩き回って、出来る仕事だけ請けて、最低限の報酬だけ貰って、野宿したりして暮らしてただ。」

自分が大事だとか、その頃は思った事なかっただな…。」

そんな生活をどのくらい送ったか、記憶も定かでなかったある日、酒場のカウンターでフルーツジュースをちびちび飲んでいると、一人のリトル・エルの騎士が声をかけて来た。

「一緒に飲んでいいですか？」

「え…。ああ、どうぞ。でも、オラ酒は飲んでねえだが…。」

「ああ、ボクもお酒飲めないの。」

リトル・エルはそう言っつて、器用に椅子によじ登って座ると、店員にフルーツジュースを注文した。

「ボクも独りで旅してるんです。」

中々、組もうと思える人がいなくて。」

そう言っつて、リトル・エルはにっこり笑った。

その後、話は盛り上がる事もなく、時折お互いにぼそぼそと何かを話すだけで、しかし何故か長時間、二人で並んで座って食事をしていた。

夜も更けて、それぞれ寢床を探しに別れる時、リトル・エルが言った。

「ボク、明日の朝八時くらいにこの街を出る予定なんです。」

もし良かったら、一緒に行きましょう。」

リトル・エルは質問ではなく誘いだけをして、手を振って行っつてしまった。

アルバインは、明日の朝か、などとすらも思わずぼんやりとその背中を見送ったが、翌朝八時には街の入り口でリトル・エルを探していた。

リトル・エルはアルバインの姿を見つけるなり、短い脚でテケテケと走り寄り、にっこり笑った。

「ボク、リチュリー・リチュと言います。」

「リ…リチュリー・リチュって、あのリチュリー・リチュ…？」

驚いて指を指すと、「リチュリー・リチュは多分、ボクしかないです。」と言ってリチュが手を差し伸べた。

握り返した手は、小さくて柔らかくて、あたたかかった。

「それから、リチュと旅をしてただ。」

リチュと会ってから、何となく、楽になったよ。

まだ後悔はしているけどもな、どうして行ったらいいかは、もう少し前向きに考えられるようになったっぺ。」

アルバインは話を少し区切って、背中を伸ばした。

「ミンミにとってウォルフは、オラにとってのリチュみたいなもんだべ。」

パーティー組んで二年、あんまりお互いの事、細かく話さなかっただな。だから、オラはミンミが誰だか知らねえし、未だにリチュの事も知らない事いっぱいあるだ。拾ってくれたウォルフの事もだべ。んでも、知らなくたって何の問題もないっぺ。

だから、困ったら何でも言うだよ。ウォルフだってリチュだって、そう思ってるっぺ。」

そう言って、にかつと笑うアルバインの肘を、ミンミは思いつ切り抓った。アルバインが声にならない声を上げて体を硬直させると、ミンミはその背に額を付けて、凭れて泣いた。

## 炎の記憶 1

ミルグ王国首都、モンルール。

シャトール・カスタから出たガルルダ大陸行きの飛空艇は、まずここへ止まる。

ミルグ王国設立の種であり、今も王国の人口の八割を占めるミヤ種は非常に商売上手で、鉱物資源脈などは乏しいが、食物繊維を使った織物を始めとして日用品の生産能力に長けており、主にそれらを軸に貿易活動を行って来た。次第に大きくなっていくバザールに、カストダル大陸や隣のマルレイン王国でも手に入らないものが多く集まるようになり、今ではモンルールの港周辺は世界最大級のバザールと呼ばれ、各国から商人が集まる。そのバザールを求め、傭兵も観光客も訪れるのである。

街並みは、ヒュントと違い、レンガは建築物には余り使わず、木材や削った石などの自然物を使って建設するので、不意に家に花が咲く事も多い。花の季節である今、街も花で満ちている。

都心にあっても三階以上の背の高い建物は少ないので、ここを訪れる者はみな、多少のノスタルジーを感じる。

人の出入りが多い上、人の行き交う道そのものが狭く作られているせいで、大抵のお尋ね者は街中においても気付かれない。

「相変わらず、すんごい人出だっぺ。」

シャトール・カスタの港市場も大層な人出であったが、ここはそれ以上だ。

中心地区を抜ければ、人通りも落ち着いてくるので、逸れないように皆で固まりながら、まずはモンルール市内を縦断して、隣街のトウリスへと向かう。

「ああ、そうか。明日”花祭り”なんだね。」

市の中心には、見事な巨木が立っている。

その木は建国当時、ここに城を建てようと思いついた初代国王の

命により切り倒される事になったのだが、その夜、木を倒せば災いが起こり、国は滅ぶというお告げの夢を観、信心深かった初代は即刻倒木を中止した。

その翌夜、救われた木によって国は護られるとエル・アムルの神託を受けた初代は、この木を国の守り神として奉り決して傷付けないうように渡し、法律としてもこれを制定した。

巨木にはいつしか供え物として花が手向けられるようになり、それが転じて日を定めて木を花で飾り付ける行事が執り行われるようになった。

”花祭り”と呼ばれるその日をまさに明日に控え、既に巨木は花に覆われていた。

巨木に近づくにつれ、通りの人通りも多くなる。

「人が多いのも、そのせいね。」

”花祭り”か。何年ぶりだっけなあ。」

「五年ぶりじゃない？」

「もうそんなになるか…。」

世界各地を回る傭兵と言えど、祭り一つを目的には移動は出来ない。移動費も嵩むし、長居をしてこそ請ける事の出来る大口の依頼もあるからだ。

偶然来る事もなければ、このようなイベントに立ち会う事も少ない。

尤も人でごった返す市の中心を抜けると、民家の立ち並ぶ住宅街だ。時折、飲食店と雑貨屋が見られる他は、様々な大きさの家々が立ち並ぶ。とは言うものの、建物自体の作りは同じなので、見栄えに変わりはない。

この住宅街を抜け、ケモノや他国からの侵略に備えた深い堀に架かる橋を渡ると、森と田畑の広がる農村地区に入る。

夕方まではひたすら畦道を行く。その先に、目指すトゥーリスがある。

市に近い場所は緑豊かなこの辺りも、道を進めば徐々に土が乾き、

緑の色も浅くなつて行く。

道中は、昨晚の話の続きをするように、旅先での思い出話に浸る。やがて陽も傾いた頃、とうとう辺りから緑の気配が消え、剥き出しの岩山が立ち並ぶ荒野に入った。この荒野を行けば、トゥーリスに到着だ。

集落は、トゥーリスからランクルに乗り、”鍋底”を縦断し、ミルグ王国の南端に向かって一直線に並ぶオアシスの一番南端までいた後、真西へ向かった先にある。

「夜中には着くな。」

「ああ。夜のほうが人目につかなくていい。」

地図を確かめつつ、前方からやってくる傭兵一行に挨拶をする。傭兵同士、商売敵である反面、仲間になり得る可能性のある相手である。

片手を挙げて会釈をすると、一行のリーダーらしきヒュントがウォルフたちを呼び止めた。

「トゥーリスへ向かうのか？」

「ああ。」

「トゥーリスの周辺で、『顔のない者』が頻繁に目撃されているらしい。注意した方がいいぞ。」

ヒュントの脇から、エルフィが顔を出した。

「いるのは一体じゃないみたいなの。気をつけて。」

「有難う、気をつけるよ。」

ウォルフが例を言うと、一行は片手を挙げて去って行った。

挙げた片手はみな一様に、”エル・アムルの祝福の羽”と呼ばれる形を作った。旅の安全を願うときや、相手の幸せを願うときなどに用いる手の形で、少し上げた親指と少し下げた中指を伸ばしたまま近づけ、人差し指を上方に、薬指を下方にそれぞれ真つ直ぐ伸ばし、小指は中指と並行にする。

エル・アムルが翼を広げて飛び立つ瞬間を象ったものだと言われている。



ウォルフも”祝福の羽”で応え、一行を見送った。

すれ違い際、一行の最後尾にいたミーヤが、ミンミを見て「あつ」と小さく声を上げた。ミンミが俯きながら横目で見ると、ミーヤははっとして口を抑え、小走りで行ってしまった。

どの街や集落にも、ケモノ避けの封術を施す事で、ヒトの住処がケモノに襲われるのを防いでいる。

同時に、ケモノも大抵は低いながらも知性を持っており、ヒト同様に自治区テリトリーを作り生活をしているので、ヒトがそれを侵さなければ、ケモノもヒトを襲う事は少ない。

ただ、ヒトはケモノを食わないが、ケモノはヒトも食う。ヒトが襲われるのは、大抵食糧としてなのである。

だから、狩りが行えなかったり、自治区のバランスが崩れてケモノの数が多くなると、食糧を求めてヒトの住処を襲うのだ。

大抵はその状況に於いて、封術とケモノの自治区を監視する事で被害を未然に防ぐ事が可能ではあるが、『顔のない者』は違う。

アレらはヒトもケモノも食わない。ヒトやケモノの血肉を齧るだけで、食う事はしない。ヒトやケモノを襲うのは、”齧るため”なのである。

そのため、襲撃のタイミングを図り難く、そしてアレらには、ヒトが住処に施した封術が効かないのであった。

「トウーリスも襲われる可能性があるね。」

リチュが言うと、ガインズが頷いた。

「そうだな。」

「登録状況に限らず、戦闘が発生するかも知れない。

気を抜かないでおいでくれ。」

ウォルフの言葉に、一行は重々しく頷いた。

やがて空がオレンジ色に染まった頃、トウーリスの街がぼんやり

と見えた。

「今日は”花祭り”あるから、人は少ないかも知れないね。」  
リチュが言った。

「おお、そうだな。いつもより人は少ないかも知れんな。  
ゆっくり酒が飲めるといいがなあ。」

ガインズが陽気に言うと、  
「何言ってるのよ？ ランクルが調達出来たらすぐに砂漠に入らなきゃいけないのよ？」

とアルミラが肘でガインズを打った。

「商人の数も少なければ、一晩明かす事になるかもな……。」  
眉間に皺を寄せるウォルフに、リチュがにっこりと笑った。

「何とか出来るように頑張るよ。」  
リチュが少し歩みを速めた。トウーリスへ入るための洞窟が見えたのだ。

荒野の岩山は背の高さこそ低い、数が多く、トウーリスの辺りが特に多い。

その岩山の一つはトウーリスへの道を塞ぐ様にして立っており、街へ入るには、岩山を掘り進めた洞窟を潜って行く。

リチュとウォルフを先頭に洞窟へ入る。洞窟は短く、分岐もない。道なりに進むと、すぐに洞窟の終わりが見えた。穴を出ると、太陽の光で一瞬目が眩む。

「ふう。」

「到着。」

トウーリスは大きなオアシスを囲む街で、主に岩盤や固い足場にテントを張って暮らしている。オアシス自体は細長い楕円を象った岩山に囲われているため、街は岩山とオアシスの隙間を埋めるように、細長く発展した。

商業施設も多くがテントになっており、野営地のような雰囲気だ。  
街だ。

あちこちに松明が立てられ、夜には火が一斉に入る。すると皆で

オアシスの周りに集まり、晚餐をするのである。晚餐は振舞うものさえ用意すれば、傭兵でも商人でも住人でも、誰でも参加出来る。

これから砂漠を越える、或いは砂漠を越えて来た傭兵にとっては、次の街へ入る前の休息の場にして、最高に満たされる場で、愛着を持つ者も多い。

「腹減っただな。」

アルバインが右手をじっと見ながら言った。

言われて気付いたが、なにやら香ばしい匂いが漂っていた。匂いはアルバインが注視している方からする。

「野ドイモの丸焼きだな。モンルールの花祭りに併せてこっちでも宴会すんだろ。」

ガインズも興味があるようで、アルバインと並んで匂いのする方を見つめてにやけた。

野ドイモは、この辺りに生息する生き物で、肉が甘く柔らかく脂身も少ないため、主に食用として狩られている野生の動物である。鼻穴の大きな少々間の抜けた顔をしており、砂漠の小さなオアシスに血族ごとに別れて生息している。デリケートな生き物であるため人工繁殖が難しく、体は大きくないが力が強いため狩るのが困難で、捕獲もなかなか出来ない。故に、野ドイモの丸焼きとなれば、トウリスの晚餐でもそうそう出る事はない、珍しい料理である。

「夜には出発してるよ?」

リチュが苦笑すると、ガインズとアルバインが一瞬残念そうな顔をし、苦笑し返した。

「そうだっただ。」

「じゃあボク、ちょっと友達のところに行って来る。」

リチュがウォルフを見上げた。

「ああ。頼んだ。」

俺たちはここらをウロウロしてるから。」

「うん。」

リチュは手を振りながらランクル厩舎へ走っていった。

リチュが交渉に向かっている間、一行は市場で時間を潰す事にした。

モンルールが近い事もあって、トゥーリスの市場もなかなか珍しいものが揃う。

隣国のマルレインから砂漠を経由してモンルールへ向かう商人がいるため、一足早くマルレイン製の装備品を手に入れる事も出来るし、これから砂漠を一晚かけて越えるのに必要な消耗品も買い揃えなければならぬ。

ガインズとアルバインは食料品を物色すると言って聞かなかつたため、それら一切を任せる事にし、ミンミもそれに同行する事になった。残るウォルフとアルミラはその他の消耗品を買い付ける事にし、待ち合わせを日暮辺りにオアシスと決めて、ガインズたちと一時別れた。

晚餐が近付くにつれ、街が賑やかになって行く。人通りも、到着した頃に比べて格段に増えた。

「みんな宴会好きよね。」

アルミラは面白そうに、すれ違う傭兵たちを眺めた。

「そりゃ、愉しみがそれしかないからな。」

ウォルフも苦笑して言う。

傭兵になつたのは人それぞれの事情でも、なつてしまえば生活は誰であろうがほぼ変わらない。

旅をし、使い切った金のために仕事を見つけ、ケモノを狩り、依頼主を護り、少量の報酬を受け取り、また旅をする。

ヒトであるから恋もするし、結果傭兵を辞め、故郷に帰る事もあるし、旅先の街に落ち着く事もある。

分岐する先はそのくらいの違いで、大差はない。

それは勿論、自分たちも同様だ。

だから解る。宴会が唯一、自分のもやもやとしたものを蹴散らせる手段なのだ。食って飲んで騒いで、疲れて寝る。この単純な行動が、自分たちを癒してくれる。

「…そうね。」

現状に甘んじる事を良しとしている訳ではないが、結局そこに留まるのだ。それは決して、誇らしい事ではない。

そんな事に思考をめぐらすうち、アルミラは切ない事を思い出した。前を歩くウォルフの背中に、一瞬哀愁が漂ったからかも知れない。

「カンナのお墓参りには、…行っていないのね…？」

アルミラの言葉に、ウォルフの肩が微かにびくついた。同時に、歩みは止まらないものの、ウォルフの足の運びに意識が感じられなくなった。

「…言っていないな。あれ以来。」

少し間が空いて、ウォルフが答えた。

「…そう。」

「そうね、大変だったものね…。ごめんなさい。」

ウォルフが答えに含んだ色々な事情を、アルミラはきちんと捕らえた。

## 炎の記憶 2

日が完全に暮れ、空がじんわり紺色に染まった頃、一行は同時にオアシスに集まった。

ガインズたちは満面の笑みで水や乾物類を抱え、ついでにドイモの串焼きまで持っている。

「ガインズとアルバインが眺めてたらくれたんだ…。相当卑しい顔してたんだぜ…。」

ミンミが呆れて言った。当の二人はさらにやりと笑う。

「まあ、出発前の腹ごしらえだ。」

ガインズが言う。

「さあ、リチュウの様子を見に行こう。」

「戻って来てるよ。」

ウォルフの声に被って、リチュウの声がした。驚いて辺りを見下ろすと、ウォルフとアルミラの間に填るように、リチュウが立って笑っていた。

「すまん…。」

罰が悪そうに、ウォルフが苦笑した。

リチュウは「大丈夫大丈夫」と言いながら、一同の脇にあった大きな岩に登って腰を下ろした。

「友達と話がついたよ。」

「おおっ！」

アルバインとミンミが同時に言っただツポーズまでした。

「明日の朝早く、コタル・オアシスの厩舎にランクルを七頭運ぶために出発するんだって。それを代行してくれるなら、そこまで乗っていいよって。」

コタル・オアシスは、これから向かう集落までの道中、道標とする三つのオアシスの最南端のオアシスである。トウーリスほど大きくはないが、このオアシスにも街がある。近くには港街シャドラン

があり、モンルールに対するトゥーリスのような位置付けになっている。

「でも、朝だべ？」

「うん。予定が朝だっただけで、コタルまで運んでくれるなら夜でも構わないって。」

「今すぐ出てもいいって事か？」

「うん。」

リチュが頷くと、ウォルフが小さく溜め息を吐いて一行を見回した。

「なら、早い方がいいな。」

準備がいいなら、今すぐ……。」

言いかけて、遠くから悲鳴が上がった。

振り向くと、トゥーリスの洞窟から傭兵が数名、足が纏れて転びそうになりながら逃げ出て来た。

「『顔のない者』だあああ！」

「！」

逃げて来た傭兵たちの声に、街中がどよめいた。

オアシスの辺りにいた傭兵の何人かが、入り口に走り出す。ウォルフたちも続いて走り出すと、洞窟の影から黒い大きなものが現れた。

「『顔のない者』！」

ガインズが叫ぶ。

夜の闇に紛れて、灯された松明に照らされて、洞窟から現れたのは、岩山で見た『顔のない者』と同じくらいの、大きなモノだった。それだけでなく、次いで二体、そしてもう二体の『顔のない者』が続いた。

合計五体のモノに、駆けつけた傭兵も怯む。

五体の『顔のない者』は洞窟を抜け、松明を薙ぎ払いながら、ヒトが逃げ行く街の中心へと歩を進める。倒れた松明の炎が、草やテントに燃え移り、火はたちまち空高く舞う。

赤く揺らめく炎に照らされ、『顔のない者』たちは尚も歩み進む。その光景は、絶句するほどに恐ろしく、傭兵すら一歩二歩と後退りしてしまふほどだった。

「封をしなきゃ……！」

リチュが言い、元来た方へ走って行った。『顔のない者』たちは歩みが鈍く、オアシスをウォルフ一行の向こう岸を回って街へ向かっていたので、先程いた場所を回ってオアシスの縁を走れば、街に入る前に『顔のない者』たちの前に着く。

「私も行くわ！」

「俺もそつちだ！」

アルミラとガインスもリチュの後に続く。

「俺らは背中から回り込んで挟む！」

齒向かう事を躊躇し立ち尽くす傭兵たちの間を縫うように、ウォルフたちは走る。その最後尾にいるミンミの耳に、いくつかの足音が聞こえた。振り向くと数名の傭兵がミンミの後を追い掛けて来ていた。

「手伝います！」

ミンミのすぐ後ろを走っていた傭兵が叫んだ。よくよく見れば、まだ幼い面影の残る青年だった。

「気をつけなよ！」

「ハイ！」

リチュは、オアシスの向こうをのろのろと、しかし着実に街へ向かう『顔のない者』を見つめながら走った。

あつという間に追い越して、一足も二足も先に街が最も密集する区画へ辿り着けそうだった。

闇の中、仄かに炎の光に浮かび上がる真っ黒の『顔のない者』に目を凝らす。



体の筋の色を見るためだ。

「…黄色ね…。」

アルミラが言った。

「黄土系なのか。」

ならば、紅蓮系の封術が有効だ。幸い松明による炎は大量にある。力を増幅出来るかも知れない。

リチュはそう考えながら、はっとして手を見た。

そうだ…。ウォルフと離れてしまったから、武器がない。

仕方がない。ウォルフと合流するまで、術で耐えるしかない。

オアシスは大きい。一周周るに十分弱はかかる。それなのに、『顔のない者』の大きさは、そうと判るほどに大きい。

遠くの方で悲鳴が聞こえる。時折、炎に照らされて、逃げ惑う小さなヒトが見える。

『顔のない者』の行き先を見る。まだ灯っている松明とオイルランプに照らされて、一か所ぼつんとヒトのいない空間を見つけた。

「あそこだ。」

リチュはさらにスピードを上げた。オアシスをご丁寧<sup>ご丁寧</sup>に周るのもどかしく、背の高い雑草の生える水辺を、水しぶきを上げて走り抜け、そして叫ぶ。

「そこ空けて!!!」

リチュの声に、良い具合にヒトが動き、空間が大きくなった。

そこへ空かさず手を翳す。

「『コマン・インスタ』…。」

絶対施封の言葉を唱えると、『顔のない者』の行く手を阻むように、空間に大きな赤い光の壁が現れた。

先頭の『顔のない者』が一瞬怯み、歩みを止めた。次々続いていた『顔のない者』も足を止め、そして最後尾の『顔のない者』が突然崩れて倒れた。

「!」

「ウォルフたちだわ!」

最後尾には小さくだがウォルフたちが見える。途中、何人かと合流したのか、知らない顔の傭兵も続く。その中で、ぽつんと独り、アルバインが立ち尽くしていた。彼は戸惑い、悲観に暮れているようだった。遠過ぎて見えないが、判る。アルバインは全身で、迷っていた。

リチュには気にかけていた事があった。アルバインが紅蓮系の魔術を使わない事だ。

今まで使う機会に恵まれなかったと言えば聞こえはいい。だが違う事をリチュは知っている。

意図して使つて来なかったのだ。

彼は、炎を拒んでいる…。

最後尾の『顔のない者』を殴り倒し、ミンミはさらに前の『顔のない者』へと走る。

ウォルフも背に背負っている大剣をリチュに渡さねばならず、倒れもがく『顔のない者』の脇を走り抜けながら振り返って叫んだ。

「アルバイン！」

少し遅れて走っていたアルバインが顔を上げる。

「潰して行くから、順に焼いて行け！！」

「……！！」

ウォルフの言葉に、アルバインが転がりそうになりながら急停止した。

「え…っ。」

呟いて、アルバインが戸惑う。状況を気にしていない青年傭兵たちは、ウォルフの指示に従い、未だもがきながら立ち上がるうとする『顔のない者』に斬りかかった。一人、魔道士がいたようで、紅蓮系の強化魔法を傭兵たちにかけて行く。駆け出しなのか魔術の強度は低かったが、人数と勢いに任せ、傭兵たちは突っ込んで行った。

そんな彼らの後ろ姿を、アルバインは急に腑抜けたように肩を下げて立ち尽くしながら見つめていた。

「…無理だ…。」  
「…無理だ…。首を振る。」

「…無理だべ…。オラには…。出来ねえ…。」  
アルバインの脳裏に、あの日の、あの炎が過る。

ウォルフもミンミも、リチュですら知らぬ、自分の過去。奇跡的に使わずに済んでいた炎に纏わる、誰にも言えない過去…。

それは、思い悩んだ末に、封印した記憶だ。

記憶が甦るとともに、息が上がった。冷や汗が体中を流れて落ちる。

喉が締め付けられる。苦しくて、涙が溢れた。ぐっと堪えると、どんだん息が上がる。

肩で息をするアルバインの腕を、魔道士が掴んだ。

「お願いします…！」

声にはっとし目の前を見れば、ミンミとウォルフは三体目の『顔のない者』に梃子摺り、続いてくれた傭兵は四体目の『顔のない者』に梃子摺っていた。何人かは、倒れて動かない。

その光景に、さらに記憶が鮮やかに甦る。

倒れる村人。燃え上がる家々。泣き叫ぶ赤ん坊たち。

そして…。

「……………」

自分の目の前で、黒い霧を吐きながらブクブクと浮腫み上がり、『顔のない者』になった、家族たち…。

「…赦してけれ…。」

あの時も、そう呟いて、泣いたのだっけ…。

背負っていた杖を握り絞め、溢れる涙で歪んだ視界に映る滲んだ黒い影に、力の限り炎をぶつけたのだっけ…。

つい数時間前まで笑い合っていた、家族たちに…。

「……………赦して…。」

仕方なかった。ああする外なかったのだ。

他の者たちを生かすために、焼くしかなかったのだ。

そう自分を納得させ、赦しを乞う外に何も出来なかった。

罪滅ぼしにもならぬ、誓いを立てた。

もう二度と、炎は呼ばないと。

なのに…。

「アルバイ…!!!」

遠くで叫ぶミンミが、『顔のない者』が振り回した腕に吹き飛ばされた。松明を倒しながら岩山に叩き付けられ、蹲って咳き込んでいる。

「…ああ…。」

アルバイが溜め息を吐いた。

このまま終わりにしようかと思うと、涙が毀れた。

だが内心、二度と繰り返したくないと思い、また涙が毀れた。

もう誰も死なせたくないと思って、涙が溢れた。

この道を歩んだ時点で、こうなる事は定めも同然か…。

ならば、せめて再び失わぬよう進むのが、幸せなのだろう…。

アルバイは、目を閉じ、すうと鼻から大きく息を吸った。

焼けた木と草と、何か嫌な物の臭いが、鼻を伝って体中を駆け巡った。

そして、キツと四体目の『顔のない者』を睨みつけると、杖を掲げた。吸い込んだ空気を総て声に乗せるように、ゆっくり、丁寧に、炎を呼ぶ。

「…『叩き潰せオルダ：ハンム：ファイダ』…。」

あの日と同じ炎を。

アルバイの声に心えるように、重く巨大な炎の弾が降り注いだ。それは幼顔の傭兵の危機を救い、彼らに火の粉も振りかける事無く、着実に『顔のない者』に命中した。

『ブブ…。』

衝撃にバランスを失い、声を上げる『顔のない者』に、幼顔の傭

兵と数名が斬りかかった。各所を切り落とされた『顔のない者』は、部位とともに崩れ落ち、塵となつて風に吹かれて散った。

それが合図にでもなつたかのように、先頭の『顔のない者』がリチュたちによつて焼かれ、二体目も倒れた。三体目の脚を切り刻んだウォルフが、隙を見て背の大剣をリチュに投げ、リチュが二体目を剣で地面に縫い付けた。その脇を駆け上がったガインスとアルミラが三体目に止めを刺す。

アルバインは、残る二体目の『顔のない者』へ、再び声を吐き出した。

まるで仇を討つように、八つ当たりをするように、冷静に、体のため込んだすべての感情を言葉に乗せた。天へ杖を振り上げると、夜空には大きな満月が浮かんでいた。

「『オルタ：チャルジ：ファイダ』…。」  
駆け抜けろ

振り下ろした杖の先から『顔のない者』目掛け炎が溢れる。炎はみるみる膨らみ勢いを増し、ごうという唸り声を上げながら、言葉通り駆け抜け、真つ直ぐ最後の『顔のない者』の体を貫いた。

『顔のない者』は膝をつき、前のめりに倒れ、塵となった。リチュが駆け寄り、光によつて昇天を促すと、塵はきらきらと舞う白い光の風とともに、夜空へ舞い上がって消えた。

街は一瞬静まり返り、そして大きな歓声が沸き起こった。

固唾を飲んで見守っていた観衆はウォルフたちに駆け寄り、勝利を讃える。

その中で独り、アルバインは呆然と立ち尽くしていた。

何もかもが落ちてしまったかのように体は弛緩し、杖すら持っているのが困難なほど力が入らなかった。

胸には複雑に感情が入り乱れ、しかし、ふわりと温かい何かを感じる。

「アルバイン…。」

声を掛けられ、見下ろすと、リチュが自分を見上げて微笑んでいた。

「それでいいんだよ。」

そう言われた途端、膝の力が抜けた。へなへなと座り込み、だらしなくリチュを見上げた。情けないくらい、涙が溢れた。

「これで、よかつたんだべか…。」

声に出して、感じていた何かを認識しかけた。

「よかつたんだよ。それで。」

その言葉に、アルバインはリチュを思い切り抱き寄せた。リチュはにこりと笑って、アルバインの頭をぼんぼんと叩く。

「赦されない過去なんて、ないんだよ…。」

未だ上がる歓声に掻き消されそうなほどに小さな声で呟かれたりチュの声に、アルバインは子供のように泣いた。

そして胸に湧き上がるのは、安堵だと確認した。

やっと、自分を赦す、その機会を得たのだ…。

### 炎の記憶 3

未だ勝利に沸き上がり、倒れた松明の消火もそこそこに、トウルズは晚餐を開始してしまった。

炎は祭りを盛り上げる櫓のように燃え上がり、『顔のない者』が倒れた場所には、人が集まり踊り始める。

その光景を、ウォルフ一行はやや冷ややかな目で見つめた。

人外である事は変わりなく、倒さねばヒトが死んでいた状況である。倒す事は必然ではあった。が、煮えきれない思いもある。それは、リチュが行った昇天を目の当たりにした事で生まれた感情でもあった。

そのリチュは、大歓声の中、独り静かに『顔のない者』が倒れた場所の隅で、モノらの昇天を祈っていた。

やがて、ウォルフに向かって弱弱しい微笑みを浮かべながら、リチュがてくてくと戻って来た。

「行こう。夜が明けてしまうから。」

リチュが言うと、ウォルフが頷き、一行は騒ぐヒトビトを避けるように厩舎へ向かった。

厩舎の入り口には、一人のエルフィの男性が立っていた。リチュを見て、手を振る。

「お疲れ様。有難うございました。」

男性はお辞儀をして一行を迎えた。

「無理を言ってしまったって、すみません。」

ウォルフが言うと、男性はにこりと笑って、  
「砂漠にもケモノは沢山います。護衛をつけなければなりませんでしたが、費用もバカになりませんでしたから、助かったのはこちらの方です。」

そう言って、行き先のアオシスにある厩舎へ、受け渡しに必要な書類と、一人一つずつ給水袋をくれた。

「こんなものしかご用意出来ませんが。」

男性が申し訳なさそうに言うと、ガインスが笑った。

「いやいや、これだけで十分です。」

一行も頷く。

男性はまだ申し訳なさそうに笑って、すぐにその笑顔を仕舞った。

「リチュ、コタルの先の様子が少しおかしいと噂で聞く。気をつけて行ってくれ。」

みなさんも、気をつけて。」

「有難う。」

そして男性に見送られ、トゥールズを後にする。

夜の砂漠は昼間ほど暑くはないが、奇妙なほどに空気が滑って心地悪い。

一行はなるべく固まってランクルを走らせる事にした。

夜の砂漠は不気味に静まり返り、時折吹く風が砂の山で唸る時、思わず背中が震える。

サラサラと砂が滑り、その上をランクルの大きな足がドドコと音を立てながら走り抜ける。

どこまでも続く砂漠の上には、几帳面に並んだ星星が瞬き、ウォルフはこまめに星を見上げながら、その方向を確認した。

一行は無言のまま、最初のオアシスに辿り着いた。月は空の真上付近に登り、日変わりが近い事を表していた。

ランクルに水を飲ませ、すぐに次のオアシスを目指す。足の速いランクルと言えど、残り四時間ほどで集落に着くには休憩は安易に挟めない。

ひたすらランクルに揺られ、出発前の戦闘が祟ったのか、砂漠のむわりとした生暖かい風のせい、疲れに目がしょぼつく。

何とか眠気を抑え進むメンバーを、先頭のウォルフが振り返って



は確認した。

だが、それもやがてなくなり、ウォルフもただ無言で前だけを見て走っていた。

うとうとしかけたリチュは気分転換にアルバインを見るなり、その様子に眠気が飛んだ。

一同が眠気と戦う中、アルバインだけは一人はつきりとした意識の中で走っていた。

目がギラギラとし、憂いを存分に帯びた表情をして、ひたすら前を見ている。

「…アルバイン？」

リチュが声をかけると、アルバインが横目でちらりとリチュをみて「ん？」と言った。

「大丈夫？」

トウルズでの事を、心配した。

そんなリチュに、アルバインが淡く笑う。

「んああ。大丈夫だ…。」

会話を聞いたウォルフが振り返った。

「無理しなくていいぞ。」

「んだ。無理じゃねえべ…。」

でも…。」

ウォルフにも笑いかけ、そして俯いた。

「なんだか、全部話しちみたいだな…。」

アルバインが言うと、今度は全員がアルバインを見た。

様子がおかしいのには気付いていた。だが、深くは誰も事情を知らない。

興味本位に近い気持ち全員が持ったが、故に全員が「話してしまいなよ」と言う事を躊躇った。

暫し沈黙の後、リチュがふと笑った。

「楽になるなら、話してしまいなよ。」

きつと、誰も後悔しないと思うから…。」

リチュの言葉に、全員が頷いた。

「んだな…。」

アルバインはそう言いながら溜め息を付いたあと、少しだけ空を見上げて息を整え、話し始めた。

「オラあ、この手で家族を焼き殺しただ…。」

パルバ・ア・ダルの北端れにある小さな村。その辺りは古来の遺跡が立ち並ぶ場所で、土も枯れかけ、ケモノすら生息しない不毛の地と呼ばれていた。

農作物がギリギリ何とか育つその土地では、最低限の暮らししか出来なかった。それでも、住民は代々、必死ながらも穏やかに暮らしていた。

だが、若者からの不満も徐々に始めていた。村には子供も少なくなっており、このままでは存続自体が危うい状況であったし、外との交流も少ないので、血が濃くなる事が懸念事項になっていたのだ。

ついに限界を感じた長は、かねてより持ちかけられていた隣村との合併の話を受ける決意をする。

正確には、隣村への集団移住の話だ。

一つ谷と森を隔てた隣村の土は、アルバインの村の土より良い土地で、作物の育ちもよかった。

村の中では合併に反対する者と賛成する者の間で派閥が生じ、家族崩壊の危機を迎えつつあった一家もあったが、内心では全員が、致し方なしという結論を秘めていた。アルバインも合併反対派ではあったが、他と同様、最終的には致し方なしと考えていた。ただ、村を棄てるなら、熟考したかったのだ。

長引く村内での話し合いの末、合併の話を進める事となり、長は村の若者の中から、道中ケモノと遭遇しても戦える力のある者を多

く連れ、隣村へ向かった。その中に、アルバインも加わっていた。村にはケモノ避けの封もしてあるから、と油断したのだった。

隣村での話し合いは円滑に進み、日取りを決める段階になって、村の幼い子供が走り込んで来た。

「大変だ！！ か、『顔のない者』が、村に：！！」  
「なに：！！？」

急ぎ村へ戻るよう言われ、長と何名かの若者を残し、アルバインと十人ほどの若者が村へと戻った時には、力ない村民たちの抵抗の跡である炎が、村の家々を糧に燃え盛っていた。

もう夕暮れで、闇に染まりかけた世界の中で、村を焼く炎の色は余りに赤く、余りに美しかった。

戻った若者は、生き残った者たちの救助と保護のため、散り散りになった。

アルバインは、逃げ惑うヒトビトの中、自分の家へと走った。アルバインの家は村のほぼ中心にあったが、避難したのかその辺りに既に人気はなかった。

ほっと胸を撫で下ろし、他の地区の救援に向かおうと踵を返したその時、ザザと焼ける家の木材が崩れ、炎の向こうに複数の人陰が揺れた。

「ジル…！？」

妹の名を呼ぶが、返事はない。

その代わりに「ブブ」という、何かの雑音のような音が聞こえた。あれはなんだ…？

そう思った瞬間、影が炎の中から飛び出して来た。驚き、寸でるところで後ろへ飛び退くと、目の前に『顔のない者』がいた。

否…。

そう認識した瞬間、違うと判った。

目の前のモノは『顔のない者』になった妹だった。

まだ『顔のない者』になり切れていない妹は、体にその面影を残しながら、頭部前方がボコボコと波打ちながら内側に凹み、徐々に

『顔のない者』へと変化を進めていた。

「ジ…ル…？」

もう一度名を呼ぶと、まだ意識があるのかふと頭部を上げ、首をくいと横に傾げた。そして即座にアルバインに襲い掛かる。

「！！」

アルバインはもう一度後ろへ飛び退き、家の中の影に目をやった。炎の中、残っていた影も徐々にこちらへ向かって歩いていく。

そして炎を跨ぎ、体に燃え移る炎に全身を焼かれながら出て来た『顔のない者』たちに、アルバインは首を振る。

「…なんて…ことを…」

目の前で蠢く『顔のない者』たち。

妹に、母、父、そして、弟だ。

いずれもまだ意識はあるのか、アルバインを見てしきりに首を傾げる。

黄土の筋の入った黒い体には、若干家族の面影が見え、頭部は妹と同じように、ボコボコと波打ち凹んでいく。

「かあちゃ…ん。」

とおちゃんも…、ウルも…。

ああ…。」

なんと…という事だ…。

目の前の四体の『顔のない者』を愕然と見つめ、アルバインは今にも崩れ落ちそうだった。

どうする、どうしたらいいのだ…。

そう思いつつ、冷静に次に採るべき行動を把握している自分…がいた。

嫌だ。それだけは否だ…。

「できねえ…。」

出来るはずもない…。

放置すれば、村人に危害を加える事だろう。

誰にも遭遇していない今、自分だからこそ、この事態を收拾出来

る。自分にしか、この役割は負えない。

そう考えていた。

頭では。

自我が残っているのか知れない元・家族たちは、アルバインに向かつて歩み寄りながら、ひたすら首を傾げていた。

そして「ブブ」という声を発し、変化を進める。

このままでは…。

アルバインの頭の中で、思考と思い出が入り混じる。

手は振るえ、涙が止め処なく溢れた。

”致し方ない”。

この時ほど、この言葉を恨んだ事はない。

「…ごめんな…。」

もう少し早く、移住の話が決まっていたら、家族は助かっただろうか。反対派だった自分に責任はあるのか…？

村に残っていたら、家族は助かっただろうか。この手にある力に全てを擦り付けて赦されるのか…？

「赦してくれ…。」

アルバインはそう言いながら自我を外し、無意識に炎を呼び出した。

「…『オルダ叩き潰せ：ハンム：ファイダ』…。」

巨大な炎の弾が、『顔のない者』否、家族目掛けて降り注ぐ。

次へ次へ…。

何十、何百と言う弾を降らせ、家族を…、家族だったモノを潰していく。

見えなくなるように。吐き払い、潰していく。

涙で世界が滲み、ゆらゆらと揺れた。

炎が砕け散る音に混じり、家族だったモノの声が聞こえる気がする。

その声すら磨り潰すように、アルバインは延々、炎の弾を降らせ続けた。

その後の事は、ほとんど記憶にない。

気付いたら、船に乗りマルレインの中規模集落にいた。

記憶を辿るが、村での出来事はほとんど記憶から消えてしまっていた。遺っていたのは、村を襲った『顔のない者』に苦手な紅蓮系の魔術で応戦し、結果村が焼けてしまったという、置き換わった記憶だけだった。

だがその時のアルバインには、そんな記憶ですら絶望に思われた。傭兵としてではなく旅人として、雑用による収入を得ながら呆然と過ごしていた時、酒場でリチュと出会った。

少しの雑談でリチュに興味を持ったアルバインは、翌日にリチュが旅立つというので、付いていく事にし、翌朝宿を引き払い、リチュと待ち合わせて街を出た。

二人で旅をするうち、知らぬ間に傭兵として依頼を受けるようになった。リチュがすでに傭兵だったせいもあったが、生きるために致し方なかった理由の方が大きい。

いくつか仕事をこなす中で、紅蓮系の魔術が一切使えなくなっていた事を知ったアルバインの無意識はやがては、力の調整が出来なかったために村が焼けたのだと言う虚無を作り上げた。

だから、飛空艇でミンミに話した事は、アルバインの中では事実であり、現実であったのだ。

「脳は、心の傷を癒すために、記憶に蓋をしてしまうんだ。

外傷に瘡蓋が出来るように、塞がれた脳による攻撃が止めば、心が癒えて来る……。」

ガインズが静かに言った。

「なにも知らないヤツはそれを”逃げ”だと言うが、そんな単純な言葉で片付けられるなら、ヒトに心なんて要らないよな。」

ガインズの言葉に、アルバインが薄く笑った。

「オラあ、どうしたらいいか解らずに、逃げてただよ…。」  
真実を反芻し、自責する。今なら、死ぬまで覚えていたかっと思える。

だがあの時は、複雑な感情の絡み合う中、考える事を止めてしまったのではないかと思う。

それは、”逃げ”でしかないと思うのだ。

「それなら…。」

吐き棄てるように言ったアルバインに、ウォルフが少し振り向いた。

「今から忘れないようにすればいい。

人生や運命は、常にバランスを保って流れている。

何かの罪を犯したなら、その罪滅ぼしの時間は必ず与えられる。」

そうであればいい。

家族は自分の炎に焼かれながら、その運命を受け入れ、自分に理解を示していただろう。僅かに残る自我で、アルバインへの攻撃を抑えていた筈だ。

ならばこれから、この真実を繋げて行かなければならない。

その先にある事こそ、自身の行いに付随する答えだろう。

## 炎の記憶 4

星空の下、真夜中を過ぎてすっかり冷え込んだ砂漠を、アルバインの過去の余韻を引き摺りながら走る。

一時的に熱風と地面から舞い上がる地熱のようなもわりとした空気の停滞する鍋底もあつという間に超え、ひたすら走った。

無口なままではあるが、心の中は話の内容にそぐわず、なにやら仄かに温かい。

何故かは解らない。ただ、暗く重く沈み込む事無く、ふわりと浮き上がり、温もりで満たされている気分なのだ。

アルバインが曝け出した事に対する、優しさなのかも知れない。

当のアルバインすら、柔らかな笑みを浮かべながら、空を見上げている。

二つ目のオアシスを抜け、三つ目のオアシスであるコタル・オアシスの影を闇の砂漠の向こうに認めた頃、ウォルフが口を開いた。

「コタルを一度通り抜ける。

目的の集落には、コタルから徒歩で四時間くらいだ。ランクルを戻してしまつと都合が悪い。

所用を済ませてコタルに戻り、ランクルを届けたら、今度は徒歩でマルレイン国境へ向かう。」

ウォルフの指示に、各人が頷いた。

離している間に、コタルの街が明確に見えるようになった。オアシスとは言え、街の周りは封術が施されたケモノ避けの高い壁に囲われている。硬い石素材で組み上げられた壁は、塔のように聳え、旅人の立ち寄りさえ拒んでいるかのようだ。

コタルの手前を西へ向かい直角に曲がる。斜めに走らないのは、方向を見失わないためだ。

手綱捌きさえ間違えなければ、真っ直ぐ走るランクルの習性を利用し、極力方向を単純化するための道程である。



西へさらに一時間ほど走り、月が東へ少し傾いた頃、ウォルフが左手を上げた。スピードを緩める、という事だった。

一同がランクルの綱を少し引き、小走り程度の速度に抑える。向かう闇の中に、集落を囲う壁と、入り口に灯された松明の灯りが浮かんでいた。

「墓地は、少し南へ下った先にある。」

そう言っつて、ウォルフが手綱を左へ引く。ランクルが頸を引つ張られ、南西へと方向を変えた。

「なあ。」

少し走つて、ガインズがウォルフの背中に声をかけた。

「ん？」

「何で、墓地が集落の外にあるんだ？」

ガインズの問いに、ウォルフが無言になった。

ウォルフにとっては何ら後ろめたい話ではない。が、この目的の主役であるミンミにとっては、少しばかり話し辛い事情がある。ウォルフが躊躇っていると、出発してから一言も口を利かなかったミンミが、ぼそりと呟いた。

「『顔のない者』たちの墓だから、だよ…。」

「『顔のない者』たちの墓？」

アルミラが振り返った。

「ああ。あたしがいた集落では、死んだ者はどう死のうが尊く葬ると言っ仕来りがある。」

『顔のない者』だろっうがなんだろっうが、元がヒトなら墓を作る。

ただ、『顔のない者』は死ぬと必ず塵になる。だから、墓と言っても中には何も入っつてない、ただの目印だけどな。」

「…襲われて…？」

リチュが訊ねると、ミンミは少しだけ無言になり、ゆっくりと話し始めた。

行く先が集落から逸れ、視界はまた、暗闇になる。

「あの集落は、昔から妙な言い伝えを守っつてるのさ…。」

フツに暮らしてちゃ、絶対に耳に入る事はないだろうと思う。  
何せ、禁忌とされた事だからね。

あの集落では、二十年に一度、神に捧げ者をするんだ。  
ヒトを贄に、エル・アムルを復活させるためにね。」

「贄に…?」

口に出したのはガインズだが、ウォルフ以外の全員がミンミを見た。

「そう。」

集落には古い言い伝えがあつて。

その昔、エル・アムルの生まれ変わりがヒトの皮で身を隠しながら、エル・ジェルシーから逃げ回っていたところ、あの集落の住人が匿ったんだつて。

ところが、エル・ジェルシーはしつこくエル・アムルを探し、ついに集落に隠れたアムルを見つけたジェルシーは、住人の目の前でアムルを殺した。」

アムルは死ぬ間に集落の住人に神託をしたそうだよ。

『月が愛の星と軸が交差する年の、花咲き乱れる日に、女神エル・アムルが宿るための肉体を、五つの目を持つ者に捧げよ。

さもなければ、世界はエル・ジェルシーの微笑みに消える。』つてね。」

「肉体たあ、また…。」

「愛の星つて、天体神話でエル・アムルの星と言われている、惑星”アムリス”の事?」

「らしいよ。」

「アムリスの軌道に月が”乗る”年つて事よね…。」

「…アムリスの軌道に月が乗るのは、二〇年に一度。  
最近だと、三年前だね。」

リチュがミンミを上目遣いに見た。

「そう。」

二〇年に一度、集落では生贄を捧げて来た。

集落の住人はそれを名誉とか栄光と言って、陶醉してたよ。」

「…五つの目を持つ者ってのは、何なんだ？」

ガイNZがそう訊ね、即座に理解をしてはっと息を飲んだ。

「…『顔のない者』か…。」

「…これから行くのは、その生贄になった者たちのための墓だ。

集落の近くには、何故かヒトに害を加えない『顔のない者』がいて、二〇年に一度の花祭りの日、十人の中から選ばれた者と使者役の老人と護衛が見守る中、集落へ『顔のない者』を招き入れる。」

「待て。ヒトに害を加えない…？」

淡々と語るミンミに驚きながら、ガイNZが訊ねる。

「ああ。何故かは知らない。

贄を捧げる日に集落に入れる『顔のない者』は、贄を齧って『顔のない者』にした後、それを食うんだ。それ以外のヒトには、誰にも手を出さない…。」

だから、集落じゃ、あの『顔のない者』は、エル・アムルが憑依したものなんじゃないかって、信じられてる。」

「…肉体を、捧げよ、か…。」

「アムルの神託には、復活なんて一言もないんだが、集落の住人は肉体を捧げる事でアムルが復活すると信じてる。

集落も、その神託があつてから、ずっとエル・アムルを盲目的に信仰してる。」

「…そんな墓地に、あんたが墓参りに行かなきゃいけないような人の墓があるって事か。」

問われて、ミンミは前方を注視した。闇の中に、徐々に距離の縮まる陰が見えた。こんもりとした小さな陰は、よくよく見ると、森だった。

墓地は、あの森の中にある。

砂漠にあつて、奇跡的に地下水脈が地上に近くまで盛り上がっているために出来た森だった。

「…妹が、いるのさ…。」

三年前の花祭りの日に、『顔のない者』に食われた妹の墓が、あるのさ……。」

「三年前の…花祭りの日……。」

ガインズが、はっとしてウォルフを見た。ウォルフは前方を見たまま、淡々とランケルの手綱を握っている。

三年前の、花祭りの日……。

その日、小さな小さな噂話程度の騒ぎが、この辺りの集落で起こった。

ウォルフと別れ、アルミラと当時の仲間の幾人かで旅をしていたとき、モンルールに立ち寄った際、マルレインからオアシス経由でモンルールに来たという行商から聞いた話だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0492t/>

---

幸多かりし賛美の世界で

2011年11月16日01時37分発行